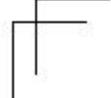
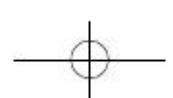
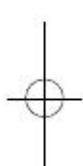
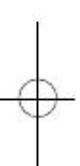
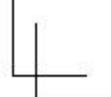
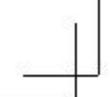


上コブケ遺跡 E 区

－国道140号(西関東連絡)道路側道建設事業に伴う発掘調査報告書－

2019.3

山梨県教育委員会
山梨県県土整備部





上コブケ遺跡 E 区遠景（西から）



上コブケ遺跡 E 区遠景（東から）

上コブケ遺跡 E 区のあらまし

【遺跡の概要】

上コブケ遺跡は、西関東連絡道路をつくるために発掘調査した遺跡です。平成23年から平成28年までに5回調査がおこなわれました。今回は、その最後で、本線の側道をつくるための調査でした。幅4m長さ130mという細長い範囲でしたが、縄文時代と平安時代の遺構・遺物が発見されました。

【縄文時代の埋甕】

今から約4,000年前の炉の跡や埋甕などが発見されました。今回の調査区の西端からたくさんの縄文土器が見つかり、その中に写真1の埋甕がありました。この土器は、底の部分がありませんが、ほぼ完全な形で埋まっていました。



写真1 模様がわかるようにした状態



写真2 土器の中がわかるように半分掘った状態

埋甕は、口縁部を上に向けた正位の状態で埋められていました。写真1をみると、口縁部の内側に蓋をするように、他の土器を逆さまにかぶせてありました。上に置かれた別の土器の口縁部をとりはずして掘り進めると、写真2のように、大きな石があり、その下にはこの土器の底部もありました。土器は底部から口縁にむけて作ります。底部と胴部以上を別々につくることはほとんどありません。このことから、わざと壊して甕の中に入れたと言えます。そして、石を置くという行動も意図的でなければ蓋のように置かれていた別の土器の説明がつきません。以上のことから、埋甕の中に何かを入れ、見えないように底部で覆い、底部が動かないように重石をする。そんな手間をかけるほど、大切なものが中にあったのかもしれません。

【古墳時代の土器】

遺跡の東側の台地には、平安時代の集落があります。しかし、それ以前の今から約1500年前の古墳時代にもこの地で生活していた痕跡が見つかりました。土師器の高坏とS字状台付甕と呼ばれる土器です。2号焼土は、穴の中で火が焚かれ、焼けた木材と焼けた土がレンズ状に残っていました。高坏は坑の底、S字状台付甕の口縁部は、その上から見つかりました。両方とも焼けた土と燃えた炭の層の中にあったのです。

周辺にはこの時代の遺跡がとても少なく、貴重な資料が追加されました。



写真3 2号焼土遺構出土土器



序 文

上コブケ遺跡は、山梨県山梨市南・北に所在します。山梨県県土整備部が進める国道140号（西関東連絡道路）の建設に伴い発掘調査が実施されました。上コブケ遺跡の発掘調査は、西関東連絡道路八幡ランプ付近の北側に沿って建設される側道工事に伴うものとして、平成28年5月から10月まで実施され、今回は最終調査となります。今回の工事によって、果樹畠の中を通る迷路のような道路が、八幡ランプまで真っ直ぐになり、地域の活性化につながることとなりました。この地域はたくさんの遺跡が存在することでも知られており、遺跡のすぐ西側には、第二次世界大戦中に「東京陸軍兵器補給廠山梨分廠」として掘削された兵器貯蔵庫とされる防空壕跡があり、斜面の下を流れる兄川の河川床からナウマン象の臼歯の化石が発見されています。また、遺跡の南側には、国重要文化財である窪八幡神社の社域が広がっています。

遺跡がある場所は、緩やかに南に傾斜する地形で、兄川・弟川に挟まれた扇状地です。弟川に左岸は、低い台地のようになっており、その先端に遺跡の広がりが見てとれます。兄川に近い傾斜地には、川に沿って縄文時代の遺構・遺物が発見されています。今回の調査でも、遺跡の西端には、土器捨て場のような遺物がたくさん出土する場所がありました。その中に、縄文時代中期の埋甕が2基あり、祭祀的な様子も見られます。また、傾斜地を上り、少し平坦になる辺りでは、古墳時代・平安時代の竪穴建物跡3軒やピットが多数発見されました。この他、溝状の遺構が発見されています。これらの中には、以前に調査された地区から続くものもあり、さらに調査区に続いていくことがわかりました。

上コブケ遺跡は、今回の調査において、当初に比べ遺跡の範囲が広がりました。しかし、今回の調査でも遺構が途切れることがなく、北側に広がる様相が確認されたことから、今後も周辺の開発事業において新たな発見があるかもしれません。

末筆となりましたが、発掘調査に伴いご支援・ご協力いただいた方々への感謝の意を表します。

平成31年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 馬場 博樹

例　言

- 1 本書は、上コブケ遺跡E区の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は国道140号(西関東連絡道路)建設事業に伴う側道建設工事に先立ち、県土整備部からの依頼をうけて山梨県教育委員会が実施した。
- 3 遺跡は、山梨県山梨市北および南地内に所在する。
- 4 調査は、山梨県教育委員会・山梨県埋蔵文化財センターが実施した。
- 5 発掘担当者は、H28年度に副主幹文化財主事笠原みゆきと非常勤嘱託職員長田隆志が担当した。整理担当者は、H29・H30年度で笠原みゆき・長田隆志が担当した。本来、H29年度に報告書の刊行であったが、同事業の他地点の発掘調査を優先的に実施する必要があったため、報告書の印刷製本のみH30年度に変更となった。
- 6 報告書の執筆は、第1章については長田隆志、第3章第3節第1項については史跡資料活用課長今福利恵が、それ以外の執筆・編集は笠原がおこなった。写真撮影は、発掘調査・整理作業も、笠原・長田が行った。
- 7 調査期間は平成28年5月～10月31日まで実施した。整理作業は基礎的整理作業を平成28年11月～平成29年3月まで、本格的整理作業を平成29年8月～平成30年3月まで実施し、平成30年度に執筆・図版作成をおこなった。
- 8 整理作業の場所は、平成28年の基礎的整理から埋蔵文化財センターの2階整理室で行っている。遺物の水洗時のみ、1階水洗室を使用した。
- 9 記録類や出土品の保管場所は、山梨県埋蔵文化財センター・考古博物館峡北収蔵施設に保管している。
- 10 発掘調査に係る調整機関は教育庁学術文化財課が行い、平成28年度の調整担当は主査文化財主事橋本尚一、平成29・30年度は主任文化財主事久保田健太郎である。
- 11 使用システムは発掘調査時の遺構図化・遺物の取り上げは遺跡システムをシン技術コンサルで、自然科学分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。空中撮影及び測量図化はシン技術コンサル、縄文土器・石器の実測・デジタルトレース・写真撮影は、株式会社アルカに委託した。
- 12 発掘調査にあたり次の方々にご指導・ご協力を賜った。山梨市教育委員会三沢達也氏、南区区長古屋照雄氏、記してお礼申し上げる。

平成28年度 作業員(発掘調査)

雨宮信次 小林英樹 阪本國廣 角田三良 直井光江 中込 樹 新田史男
萩原森詞 保坂悌司 松本榮一 水上喜正 宮下善雄 箭本公幸 渡邊紀子

平成28年度 作業員(基礎的整理作業)

雨宮信次 飯室恵子 小池幹子 小菅春江 小林英樹 小松千賀子 清水真弓
生原浩美 原 雅喜 藤原さつき

平成29年度 作業員(本格的整理作業)

石坂恵理 小池幹子 小池美保子 斎藤律子 土井みさほ 新津多恵
平川涼子 藤原さつき

凡例

・発掘調査時に付けたE区-1・2・3・4区という地区名をそのまま報告書内でも使用する。

・注記番号も地区名ごと、例)上コブケ1区P1～となっている。

全体図 S=1/1200 石圓い炉 S=1/30 縄文土器 S=1/3 土師器 S=1/3

石器 S=1/3、1/1、土偶・土製品 S=1/1 平安時代堅穴建物跡・溝状遺構 S=1/40

縄文時代配石遺構 S=1/40 Pit S=1/30 焼土範圍にはスクリーントーン ピットと焼土は一覧表で示した

目 次

卷頭・あらまし

序

例言

凡例

目次

第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の目的と課題	2
第3節 発掘調査の経過	2
第4節 室内整理等の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の方法と成果	4
第1節 調査の方法	4
第2節 層序	4
第3節 遺構	4
第1項 縄文時代の遺構	4
第2項 古墳時代・平安時代の遺構	6
第4節 遺物	8
第1項 縄文時代の遺物	8
第2項 古墳時代・平安時代の遺物	12
第4章 まとめ	13
第1節 縄文時代について	13
第2節 古墳時代・平安時代について	13

写真図版

報告書抄録・奥付



挿図目次

表目次・図版目次

キャプション

巻頭図版1 上コブケ遺跡E区遠景(西から)

上コブケ遺跡E区遠景(東から)

あらまし 写真1 文様がわかるようにした状態

写真2 土器の中がわかるように半分掘った状態

写真3 2号焼土遺構出土土器

挿図目次

第1図 遺跡位置図	14
第2図 工事路線図	14
第3図 周辺の遺跡分布図	15
第4図 上コブケ遺跡E区全体図	16
第5図 土層断面図	16
第6図 E-1・2区遺構配置図	17
第7図 E-3・4区遺構配置図	18
第8図 E-1区遺構図版 (1号炉・1・3~6号配石・遺物集中区)	19
第9図 E-1・2区遺構図版 (1・2号埋甕・4号焼土・2・3号集石/1号住居跡・炉跡)	20
第10図 E-2区遺構図版 (1号配石・1号埋甕・2~4号焼土)	21
第11図 E-3区遺構図版(1・2号住居・1・2号焼土)	22
第12図 E-3・4区遺構図版(2号溝・4号溝)	23
第13図 E-1区遺物図版 繩文土器1	29
第14図 E-1区遺物図版 繩文土器2	30
第15図 E-1区遺物図版 繩文土器3	31
第16図 E-1区遺物図版 繩文土器4	32
第17図 E-1区遺物図版 繩文土器5	33
第18図 E-1区遺物図版 繩文土器6	34
第19図 E-1区遺物図版 繩文土器7	35
第20図 E-1区遺物図版 繩文土器8	36
第21図 E-1区遺物図版 繩文土器9	37
第22図 E-1区遺物図版 繩文土器10	38
第23図 E-1区遺物図版 繩文土器11	39
第24図 E-1区遺物図版 繩文土器12	40
第25図 E-1区遺物図版 繩文土器13	41
第26図 E-1区遺物図版 繩文土器14	42
第27図 E-1区遺物図版 繩文土器15	43
第28図 E-1区遺物図版 繩文土器16	44
第29図 E-1区遺物図版 繩文土器17	45
第30図 E-1区遺物図版 繩文土器18(土製品)	46

第31図 E-1区遺物図版 繩文土器19

(器台・土偶) 47

第32図 E-1・2区遺物図版 繩文土器20

(土偶・土製品) 48

第33図 E-2区遺物図版 繩文土器21 49

第34図 E-2区遺物図版 繩文土器22 50

第35図 E-2区遺物図版 繩文土器23 51

第36図 E-2区遺物図版 繩文土器24 52

第37図 E-2区遺物図版 繩文土器25 53

第38図 E-2区遺物図版 繩文土器26

(土偶・器台) 54

第39図 E-1・2区遺物図版 繩文土器27

(土偶・土製品・その他) 55

第40図 E-1区遺物図版 石器1 56

第41図 E-1区遺物図版 石器2 57

第42図 E-1区遺物図版 石器3 58

第43図 E-1区遺物図版 石器4 59

第44図 E-1区遺物図版 石器5 60

第45図 E-1区遺物図版 石器6 61

第46図 E-1区遺物図版 石器7 62

第47図 E-1区遺物図版 石器8 63

第48図 E-1区遺物図版 石器9 64

第49図 E-1区遺物図版 石器10 65

第50図 E-2区遺物図版 石器11 66

第51図 E-2・4区遺物図版 石器12 67

第52図 E-3区遺物図版 土師器・須恵器1

(1号住) 68

第53図 E-3区遺物図版 土師器・須恵器2

(2~4号住・1溝) 69

第54図 E-3区遺物図版 土師器・須恵器3

(1・2号焼土・ビット) 70

第55図 E-3区遺物図版 土師器・須恵器4(ビット) 71

第56図 E-3・4区遺物図版 土師器・須恵器5

(4号溝・遺構外) 72

表目次

第1表 周辺の遺跡一覧表 24

第2表 ビット一覧表 25

第3表 遺物一覧表(古墳時代・平安時代) 26

第4表 石器観察表 28

写真図版1~10

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経過

1) 調査の原因

西関東連絡道路は、甲府市横根町から埼玉県深谷市に至る延長約110kmの道路である。平成23・24年度にかけて本線部分の発掘調査が行われ、縄文時代・古墳時代・平安時代の集落跡が確認されている。今回は本線北側に側道を建設する事業であり、工事区間が周知の埋蔵文化財包蔵地である「上コブケ遺跡」の範囲内であったため、平成28年3月2日に新環状・西関東道路建設事務所、県学術文化財課、埋文センターの3者で現地協議を実施し、調査に伴い平成28年4月1日付で道路整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する覚書が県土整備部道路整備課長と県教委学術文化財課長の間で締結された。しかし、平成28年度の新体制となり、埋蔵文化財センターの人員の入れ替えがあったため、平成28年4月6日に3者で工事の期間や埋文調査の内容等について現地で再度協議を行った。この結果を受けて、平成28年5月18日から発掘調査が実施されることとなった。

○協議・打ち合わせ等

[平成28年度]

- ・平成28年3月2日 国道140号（西関東連絡道路）建設事業に関する事前協議
- ・平成28年4月6日 国道140号（西関東連絡道路）建設事業に関する現地協議

○調査に係る事務手続き

調査にあたっては、文化財保護法に基づく報告・通知の他、発掘調査の成果に係る報告を行った。それらの事務手続きは以下の通りである。

[平成28年度]

- ・平成28年4月1日付で、山梨県県土整備部道路整備課長と山梨県教育委員会学術文化財課長とで国道140号（西関東連絡道路）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書を締結〔教学文第56号：道路整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する覚書締結について〕

- ・平成28年5月23・24日 文化財保護法第99条第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査着手の報告を山梨県教育委員会教育長へ（23日）、山梨市教育委員会教育長へ（24日）提出〔教埋文第163号：埋蔵文化財発掘調査の実施について（山梨市 上コブケ遺跡）〕

- ・平成28年11月4日 文化財保護法第100条第2項の規定により埋蔵文化財発見の通知を山梨県教育委員会教育長へ依頼〔教埋文第644号：埋蔵文化財の発見について（上コブケ遺跡）〕

- ・平成28年11月14日 発掘調査の終了報告を山梨県教育委員会学術文化財課長へ提出〔教埋文第657号：国道140号（西関東連絡道路）建設事業に伴う発掘調査（上コブケ遺跡）の終了について〕

- ・平成29年3月9日 発掘調査実績報告書を山梨県教育委員会教育長へ提出〔教埋文第991号：実績報告書（上コブケ遺跡）の提出について〕

[平成29年度]

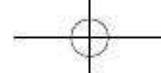
- ・平成29年5月8日付で、山梨県県土整備部道路整備課長と山梨県教育委員会学術文化財課長とで国道140号（西関東連絡道路）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書を締結〔教学文第770号：道路事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する覚書について〕

- ・平成30年3月26日 本格的整理作業の実績報告書を山梨県教育委員会教育長へ提出〔教埋文第766号：実績報告書（上コブケ遺跡）の提出について〕

[平成30年度]

- ・平成30年6月6日付で、山梨県県土整備部道路整備課長と山梨県教育委員会学術文化財課長とで国道140号（西関東連絡道路）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書を締結〔教学文第866号：道路事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する覚書について〕

- ・平成31年3月22日 報告書刊行発送



第2節 調査の目的と課題

今回の調査は、側道部分の調査である。平成23・24年度に実施された本線部分の調査（上コブケ遺跡A・B・C・D区）との連続性を検証し、北側への遺跡の広がりを確認し、これら遺構・遺物の記録保存を行うことを目的とする。また、縄文時代や古墳時代・平安時代の遺構や遺物などが確認され、遺跡における生活や土地利用等の変遷過程を解明していくための資料として、各時代の遺構・遺物の分布をとらえていくことを課題とする。

第3節 発掘作業の経過

平成28年5月18日から発掘調査を開始した。調査の工程は、排土置き場が十分に確保できないため、調査区を4分割（調査区西側をE区-1とE区-2、調査区東側をE区-3とE区-4）し、E区-1から調査を始めた。重機による表土剥ぎ後、人力による掘削・精査を行い、土層の堆積状況の確認や光波測量および写真撮影等による遺構・遺物等の記録化を図った。また、外部委託による杭打ち（世界測地系座標による基準杭の設置）作業を各調査開始時（5月26日、7月26日、9月5日、10月4日）に、空中写真撮影を各調査区の調査終了時（7月15日、8月24日、9月28日、10月20日）に実施し、10月31日をもって調査を終了した。発見届は、平成28年11月4日付に学術文化財課経由で所轄警察署に提出し、11月14日付で終了報告書を提出した。

（調査体制）

平成28年度（発掘調査・基礎的整理作業）

調査主体 山梨県教育委員会

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

所長 中山誠二 次長 高野玄明 調査研究課長 今福利恵 史跡資料活用課長 保坂和博

担当者 副主幹・文化財主事 笠原みゆき 非常勤嘱託 長田隆志

第4節 整理等作業の経過

上コブケ遺跡の遺物出土量は、プラスチック収納箱にして85箱である。室内における図面整理・出土品の洗浄などの基礎的整理作業を平成28年10月16日から3月17日まで実施した。また、遺物の接合や実測作業等を中心とした本格的整理作業を平成29年5月15日から平成30年3月20日まで実施した。作業内容は、遺物の接合、実測、トレース、版組作業を実施した。当初、平成30年度の報告書刊行事業であったが、同事業の発掘調査をH30年度内に完了させる必要が生じ、一部の図版作成・原稿執筆などを次年次に持ち越すこととなった。そのため、平成30年度は、原稿執筆・編集作業を進め、報告書刊行をおこなった。

（整理体制）

平成28・29・30年度（基礎的整理・本格的整理作業）

調査主体 山梨県教育委員会

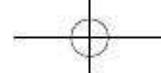
調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

所長 中山誠二（H28・29）、馬場博樹（H30）、次長 高野玄明（H28・29・30）

調査研究課長 今福利恵（H28・29）、笠原みゆき（H30）

史跡資料活用課長 保坂和博（H28・29）、今福利恵（H30）

担当者 副主幹・文化財主事 笠原みゆき 非常勤嘱託 長田隆志



第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

遺跡が所在する山梨県山梨市は甲府盆地の東側に位置し、北部に甲武信ヶ岳・国師ヶ岳・笠取山、南部には緩やかな南向きの斜面が広がり甲府盆地へとつながる。また、笛吹川と重川が市の北東から南西に流れ、市の南側地域は扇状地や氾濫減といった河川地形が発達する。これらの大な川に流れ込む兄川や弟川等の支流に挟まれた地域に遺跡は存在している。産業技術総合研究所地質調査総合センター「地質図 Navi」を参考にすると、上コブケ遺跡は東西に伸びる中位段丘の南端に位置する。遺跡の範囲を地質図と照らし合わせると、中位段丘の周りを取り囲むように低位段丘が形成されており、遺跡内の古墳時代・平安時代の集落跡は中位段丘上に、縄文時代の集落跡は低位段丘上にあることがわかる。遺跡の標高を見ると、E-1・2区はほとんど平坦で約372(371.3)m、E-3区の西側で375.5m、E-3区東側およびE-4区西側で375.8m、4区東側で375.8mを測り、E-1・2区とE-3・4区では約3.8mの比高差がある。E-1・2区とE-3・4区の間は約86m離れており、緩やかな傾斜をもつ地形となっている。現状は果樹園であり、畑の間を農道が迷路のように走っている。この事業によって西関東連絡道路の本線北側を集落の西端から八幡ランプまで直線で通行できるようになった。

第2節 歴史的環境

遺跡が存在する山梨市は、2005年（平成17）に旧牧丘町と旧三富村と合併し現在の市域となった。遺跡の分布については、「山梨市市内遺跡発掘調査報告書2017」に掲載された遺跡分布図に基づく。ここでは、旧市町村域に分けて分布図を作成しているため、本報告書にはそのままの遺跡番号で記述する。

上コブケ遺跡（5041）は、本事業に伴う発掘調査の結果、当初の埋蔵文化財包蔵地の範囲から大きく変更されている。また、同事業では、廻り田遺跡（5190）・膳棚遺跡（5191）という新しい遺跡の発見があった。前者は古墳時代、後者は平安時代の集落跡で、後に至っては10世紀後半頃の竪穴建物跡41件が検出され、土師器・縄文陶器・灰釉陶器など多くの遺物を発見できた。遺跡の南西側の山際には兄川が西から東に流れしており、そこに兄川河床遺跡（5042）があり、ナウマン象の臼歯の化石が発見されている。兄川の上流には上コブケ遺跡と同じ時期の遺跡である江曾原遺跡（5040）、芦原遺跡（5009）がある。遺跡がある地域は兄川と弟川によって形成されており、弟川の川沿いには市川西遺跡（5012）・植田遺跡（5013）・市川東遺跡（5017）の縄文時代の遺跡と、神明前遺跡（5192）・神明前遺跡（5015）・於北南遺跡（5014）・犬塚遺跡（5016）の平安時代の遺跡、樋詰裏遺跡（5026）・西片山遺跡（5031）の中世・近世の遺跡が点在する。弟川は西から東方向へ流れ、廻り田遺跡の手前で、急に南側へ流路を変える。そして、上流から下流へ向かい縄文・平安・中世と時代がさかのぼっていく。そして、その先には国の重要文化財に指定されている中世の窟八幡神社（5182）・窟八幡神社社家坊中群（5183）、近世の清水陣屋跡（5186）がある。少し離れて、笛吹川と弟川が合流するあたりに、窟八幡神社旧社地跡がある。笛吹川の対岸には多くの遺跡が点在しており、窟八幡神社の対岸には、八王子遺跡（5073）・立石遺跡（5074）・日下部遺跡（5075）・西久保遺跡（5076）・下ノ原遺跡（5077）・大堀遺跡（5078）・安田義定館跡（5176・5177）という縄文から平安・中世まで続く大規模な集落跡がある。また、笛吹川沿いに中世の權現窟経塚（5082）、笛吹川堤防群（5194）がある。

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

E-1・2区幅約4m・長さ約70m、E-3・4区幅約4m・長さ約57mという2分された調査区である。掘削土を置く場所の都合上、平成23年度の調査成果をもとに重機による表土の除去を行った。掘削した土を置くところが無いため、それぞれの区を反転して調査を実施した。表土を除去した後、人力による掘削・遺構の精査を行った。道路幅が狭いため、調査区内にはグリッド杭は打たず、調査区外に14本の基準杭と調査区内に4本の標高杭（仮BM）を設置した。遺構の平面図・遺物の取り上げは光波測量機で使用し、断面図と遺物の微細図等は職員・作業員などが測量・作図した。調査中の遺構・遺物などは、モノクロ・カラーの35mmフィルムとコンパクトデジタルカメラで撮影した。

第2節 層序

E-1・2区については、耕作土の直下が包含層の確認面であり、地表下50～80cmで遺構が検出される。3・4区については地表下15～30cmで遺構確認面・遺物包含層となる。（第5図参照。）

第3節 遺構

第1項 縄文時代の遺構

1区では炉跡1・配石遺構6・集石2・埋甕3・焼土遺構2箇所、遺物集中箇所1箇所・ピット13基が検出された。

2区では炉跡1・配石遺構2・埋甕1・焼土遺構4箇所・遺物集中箇所1箇所・ピット30基が検出された。

・1区-1号炉跡

AD-5～AD-6グリッド。平らな面の高さを揃えた5つの石を配置している。石囲い炉の多くは、竪穴式住居跡の床面中央付近に作られ、火を炊く施設である。表土直下から検出され、調査幅のほぼ中央に位置していることから、竪穴の掘り方は確認できなかった。周辺に数点遺物が検出されているが、炉に付属するものかは判断できない。炉石の外側で測量して東西97cm、南北105cmである。炉の中の土を半裁し土層観察を行ったところ、ほとんど焼土が検出されなかった。遺物集中箇所と炉は2mほどしか離れておらず、その関係性も考えられるが、炉の形態と出土した土器の年代観察から、若干の時期差がある。

・1区-1号配石遺構

AG-2～AG-3グリッド。人頭大の石が東西約3m・南北1.3mの半円径に配置された部分を配石とした。半分は南側の壁の中となる。1号埋甕の確認面と同じ標高で確認された。周辺にも所どころ、立石のような細長い石も確認される。

・1区-2号配石遺構

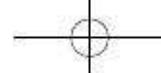
AE-4～5・AD-5グリッド。調査区北壁に半円形のみ検出された。半円形に拳大から手の平大の石を並べたように検出された。遺物若干検出される。

・1区-3号配石遺構

AD-5グリッド周辺。北側の壁際から半円径で確認された。遺物は少ない。

・1区-4号配石遺構

AG-2グリッド、1号配石の西側に位置する。拳大の石を円形に配置したもの。遺物出土。配石には丸石・



すり石を使っている。周囲に長細い大礫があり、列になっているように見える。立たせれば立石とも見える礫に囲まれ、拳大の礫が円形にめぐる。

・1区-5号配石遺構

AF-2～AG-2グリッド。1号配石の北側に続くように検出され、4号配石とも近接している。

・1区-6号配石遺構

AC-7グリッド。拳大の礫が並ぶ。おなかを下にした状態で土偶（第31図217）が出土している。

・1区-2号集石

AG-1～2グリッド。直径cmの円形。手のひら半分ほどの小石から拳大の石が集中している。土器・石器が若干含まれる。炭化した材が石の間に入り、火を受けている。1号2号集石は欠番。

・1区-3号集石

AC-7グリッド。直径約80cm・深さ約16cmの掘り込みを持つ。拳大の石がまとまって検出された。石の中には磨石や遺物が混ざる。

・1区-1号埋甕

AF-2グリッド。縄文時代中期曾利II式くらい。遺構確認の早い頃に確認される。口径50cm、器高45cm、胴部最大径42cm、正位に埋められていた。1個体の底部を割って、その底部を胴部内に逆さまに置き、その上に人頭大の石を置いたような状態で検出された。また、口縁部には、口縁部の口を合わせるように、別個体の口縁部を逆位にかぶせた状態で出土した。土器の内部の土壤を分析したが、動物の脂肪酸にかかわる数値は検出できなかった。

・1区-2号埋甕

AF-2グリッド。口径22cm、器高18cmの正位で埋められた深鉢土器。底部は欠損している。周辺には人頭の石が置かれているようであった。

・1区-3号埋甕

AC-6グリッド。口径23cm、器高10cmの正位で埋められた浅鉢型土器。口縁部の端に長さ15cm、幅6cmの磨石が置かれていた。

1区遺物集中箇所

AD-6グリッド。1号炉跡の東側に位置する。

・2区-1号住居跡

AA-8・AB-8～AA-9グリッド。表土剥ぎの段階で遺物が重なりあって出土する広がりがあった。遺物包含層を掘り下げていくと、遺物と一緒に焼けた細長い石が検出された。遺物を取り除くと、壊れた石囲い炉が発見された。炉の大きさは、幅63センチほどで4辺の内2辺の石が抜かれていた。

・2区-1号埋甕・2～3号焼土遺構

1号埋甕・2・4号焼土はAA-9、3号焼土AB-9グリッド。1号埋甕は口径40cm、器高30cmの正位で埋められた深鉢土器。後世の暗渠により北側半分と底部が欠損している。周辺には人頭大の平らな石がある。周囲には逆さまに置かれた浅鉢型土器や焼土の広がりが3箇所確認できた。



・2区-1号配石

AB-7～AC-7グリッド。調査区の幅約3.3mで、幅約1.3mの広がりを持つ。大きく平らな石を北壁に配し、長細い石が所々に見られる。立石の可能性もある。部分的に石が配置されず、その周辺では磨石などが置かれる。南壁には石が多く入り込んでいるが、北側はやや少ない。石が少ない部分の付近に焼土や炭化材が見られる。土器の出土は少ない。

・2区-2号配石

AA-9グリッド。6個の細長い石を長方形に配している。半裁して土層観察をおこなったが、焼土や炭化材、遺物などは検出できなかった。

・2区-1号焼土

AB-7～8グリッド。長軸約1m10cm、短軸約73cm、深さ9cmの楕円形。2～4cmにカチカチに焼けた焼土がある。炭化材はほとんど含まない。

第2項 古墳時代・平安時代の遺構

3区では、竪穴建物跡3(3号欠番)・溝状遺構2条、焼土遺構2箇所、ピット85基(70-79欠番)が検出された。4区では、溝状遺構3条(1号欠番)、焼土遺構2箇所、ピット35基が検出された。

・3区-1号竪穴建物跡

M-34～N-34グリッド。南壁には半分が残り、調査できた2辺の長さは南北約3m、東西3.2m、深さ10cmである。カマドや貼床は検出できなかった。住居の壁際に溝状の掘り込みが、部分的に確認された。住居の周辺には、1mほど離れた場所に間隔の近いピットが数基みられ、住居外柱穴の可能性もある。D区の北西隅と隣接し、D区では住居跡としなかったが完形の壊や焼土が検出されていたことから、D区側にカマドがあった可能性が高い。遺物は、土師器壊・皿・蓋・甕、須恵器甕、灰釉陶器が出土している。

・3区-2号竪穴建物跡

M-32～32グリッド。東西約1.6m・南北約1mの範囲に焼土が広がる。周辺には完形の土師器が出土した。遺物が集中し焼土も広がっているが、掘方がはっきりしなかった。カマドを壊した残りの可能性がある。

・3区-4号竪穴建物跡

N-33グリッド。1号住居跡の西側に位置する。東西約1m30cm・南北約1mを測る北西の角である。A区と隣接するが、A区では遺構が検出されていない。1号竪穴建物跡と重複する可能性もある。

・3区-1号溝状遺構

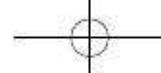
N-31～N-32グリッド。幅60cm・長さ4m、確認面よりの深さ10cmで、古墳時代の台壠甕の破片が出土している。A区からは検出されていないが、古墳時代の遺物が出土するエリアなので、続いていた可能はある。

・3区-2号溝状遺構

O-28～P-28グリッド。幅は北壁で1m80cm、壁から1m40cmで西側に向かって屈曲する。南西端の幅は60cmで、深さは北壁で30cm、南西にむかって浅くなり消滅してしまう。遺物は土師器破片が数点出土している。

・3区-1号焼土遺構

P-28グリッド。長軸約1m、短軸約70cmの卵形を呈する。深さ約6cmで、焼けて硬くしまった赤褐色



土が検出された。遺物はない。

・3区-2号焼土遺構

N-33グリッド。長軸約1.1m、短軸約60cm、深さ約15cmで、南壁に遺構の約半分が入っている。焼土と灰が混ざる覆土の下に炭化材と焼土がレンズ状に堆積している。S字状台付き甕は焼土層の上から、高壙はこの焼土層下から検出された。この炭化材を年代測定したところ、4世紀前半頃の年代が与えられた。

・4区-2号溝状遺構

L-35～M-35グリッド。長さ約3m40cm、幅約60cm、深さ約20cmを測る。遺物は出土していない。

・4区-3号溝状遺構

M-35グリッド。長さ約2m30cm、幅約15cm、深さ約10cmを測る。遺物は出土していない。

・4区-4号溝状遺構

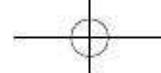
M-34グリッド。3区の1号竪穴建物跡と重複している。長さ約4m20cm、幅約50～80cm、深さ約24cmを測る。確認面では、斬り合いが確認できなかったが、1号竪穴建物跡より古いと考える。

・4区-2号焼土遺構

M-35グリッド。長軸約70cm、短軸約40cm、深さ約10cmを測る。硬くしまった面はなく赤褐色土が混ざる程度である。

・4区-1号遺構

L-36グリッド。長軸約40cm、短軸約30cm、深さ約10cmを測り、3号トレンチで半分壊されていた。遺物は検出されていない。



第4節 遺物

第1項 縄文時代の遺物

1号埋甕

1 口縁部に斜行条線がつく曾利II式の土器である。口唇部は大きく内折する。頸部には横位の連続押圧が三条めぐる。胴部は縦位条線のうえに粘土紐で渦巻文や蛇行懸垂文が施される。器面は全体に荒れている。
2、口縁部がほぼ一周する。直下でくびれ、前後に箇所にX字状の把手がつく。器面は荒れており斜縄文が横位や縦位方向など不規則に施されている。

2号埋甕

3、無文の土器

2号焼土

4、鉢形土器ではほぼ完形である。平面形はわずかに梢円形となっており、長軸上に逆三角形の添付文がそれぞれ外側と内面口唇部にみられ、わずかに突出する。口縁部内面はやや肥厚し稜線をもつ。ほか外面に文様はみられず、器面は荒れている。諸磯b式。

前期前半 5、口唇部をやや厚くつくり、口唇上に刻みと刺突を交互にいれている。外面には斜格子沈線が施されている。

諸磯b式土器

浮線文6～10 斜めに刻まれた浮線によって文様を描出している。8は地文に縄文施文された上に低くやや幅広い浮線がつく。

沈線文11～19 縄文を地紋として半歳竹管内面によって横位の文様を描出する。11口縁部は強く内湾して口唇部にはわずかな刻みがめぐる。12、13は内接するように強く屈曲する。

縄文20～26 20は口縁部に無文帶があり胴部は縄文となる。内面はていねいにみがかれている。21は口唇部に稜をもちわずかな無文部をとる。24は横位の結節縄文が認められる。25は無節縄文が施文されている。26は横位結節縄文が二段みられる。

浅鉢27～28 27は口唇部直下に連続爪形文がめぐる。28は口唇部が内折し半歳竹管内面による沈線がめぐる。胴部は縄文施文。

前期末 29 細い隆線上にさらに幅狭のC字形刻みが連続する。北白川III式に比定。

有孔土器 30～33 口唇部が短く立ち上がり、その直下に孔がめぐる。胎土は緻密である。

五領ヶ台II式土器

集合沈線文系土器34～48 口唇部に狭い文様帶をもち、横位区画した中を交互刺突文がめぐる。35は口唇部と口縁下の屈折部に連続爪形文が施される。37、38、40～42は頸部に貼付文がついて胴部文様を縦位に区画する。38は口縁部文様帶の屈折部を省略し、沈線文様は残して波状口縁となる。37の頸部上の斜格子文は斜格子の一方の間隔が広く、39はほぼ縦位になる。37、40の胴部の区画文様には縄文がみられる。41、42は同一個体か。波状口縁の口唇部には連続爪形文の隆帶がめぐり、上端部には結節沈線が施される。41～43は集合沈線によって胴部文様を縦に区画している。46は口唇部に狭く屈曲した文様帶をもつが45の口縁部上には沈線にて横位に区画され交互刺突文がめぐる。47には口唇部上端に刻みが、頸部は横位集合沈線がめぐり、胴部下半は無文となる。48は頸部に連続爪形文の隆線がめぐり、貼付文とそこから放物線状の懸垂文がつき、また縦位の集合沈線が沈線にて区切られる。胴部は49～58となる。49と50は同一個体か。浅い縄文地紋に沈線で文様を描出し、隆線上にも縄文施文される。52は波状口縁で口唇部に連続爪形文と斜位の集合沈線文からなる。51、54は頸部の横位沈線を割ってはいるように縦位区画沈線による懸垂文が施文される。55、56は胴部の縦位区画沈線が底部まで施されている。

口縁部縄文帶系土器59～83 口縁部に狭い縄文施文された文様帶をもち、その内面が肥厚する。64、65、68は口縁部文様帶が狭く、その下にも縄文が施文されるが、65には口縁部に縄文がない。66、67は二段の縄文帶。71は波状口縁の波頂部で口唇部に深い刻みと円文がつく。69は肥厚する口縁部には縦の連続刺突



文が並ぶ。わずかな突起から「ノ」字状の短い隆線懸垂文がつく。直下の交互刺突文がめぐる横位沈線以下は無文。70は口縁部下に隆線がめぐるが縄文はみられない。72～75は口縁部の突起となる。76は頸部につぶれた眼鏡状貼付文がついている。77、78は口縁部下に沈線と交互刺突文に橋状突起がつく。79は口縁部下に隆線がめぐる。80は口縁部下の交互刺突文で大きく屈曲する頸部となる。81～83は胴部がやや反るか直立するもので口縁部が短く外反する。81は口縁部に狭い縄文帯があり、無文帯をはさんで刻み隆線がめぐる。貼付文の間を逆U字状沈線で連結してここを起点にした縦位の懸垂文で胴部を分割する。82は口縁にわずかな突起がみられ、狭い縄文帯がめぐる。胴部は結節縄文が施文。83は口縁部の縄文帯上の口唇部上端に刻みがあり、縄文帯下端を刺突のある沈線で区画しているが、胴部は無文となる。

胴部 84～87 84は胴部にRLの結節縄文が縦位施文される。86、87には結節縄文がみられる。

弧線文系土器 88～95 88は胴部がふくらむ波状口縁の器形となり、波状部直下とその頸部に貼付文がある。口縁部上端には縄文が施されている。89にも口縁部に縄文帯があり刻みのある沈線で下端部を区画する。89は口縁部に狭い縄文帯があり、その下には縄文地紋の交互の弧線が重なる。91は口縁部上端のせまい縄文帯下に隆線による上下の弧線が重なり、区画された中には縄文地紋で沈線と玉抱三叉文が充填される。92には三角印刻文がみられる。93はややせまい口縁部文様帶に弧線で区画され、なかには沈線と玉抱三叉文がみられる。94、98は弧線で区画されたなかに三角印刻文と三叉文がみられる。95は、口縁部下に円形刺突が伴う沈線がめぐり、口唇部上端には連続爪形文が施される。突起内面には渦巻貼付文がつく。胴部 96～103 放物線状の沈線が隆線で横位区画された結節縄文の胴部に施される。99は垂下する隆線懸垂文に沈線が沿い、隆線上ともども結節縄文が施文される。100はY字状懸垂文で区画された胴部に結節縄文がつく。浅鉢 104～118 105は外面口縁部が縄文地紋で横位沈線がめぐる。胴部は無文。106は波状口縁の浅鉢で口縁内面に結節沈線による文様がつく。107、109、110は同一個体で、肥厚させた口縁部内面に結節沈線文様がめぐり、文様下段は交互刺突となる。108は幅広の連続爪形文がめぐり中段が交互刺突文となる。111、112は同一個体で、文様中段に交互刺突がめぐる。114は文様上段が連続押圧、下段が交互刺突である。116～118は幅の狭い結節沈線がめぐる。

勝坂式土器

猪沢式段階 119～120 隆線に沿って結節沈線が施文される。119は口縁部破片で口唇部に沿ってU字形貼付文が突起状につく。120は胴部破片で横位と縦位の隆線交点に貼付文がつく。

新道式段階 121～135 三角押文が施文され、121、122は隆線に沿って幅広の連続爪形文が施文され、口縁部に円形貼付文が三叉文とともに突起状につく。123は区画内に三叉文がみられる。124～127は同じく胴部破片で、隆線に沿って幅広連続爪形文と波状の三角押文がつく。130、131は縄文が施文されている。135は縦位のパネル文区画内に三角横紋が充填される。

藤内式段階 136～146 136はパネル文で連続爪形文が充填される。137、138は隆線に沿う幅広連続爪形文に波状沈線が伴い、三角押文はみられない。139、140、142の隆線上には連続爪形文が刻まれる。143は隆線上に綾杉状刻みがみられる。144は区画内に蓮華文がつく。146は隆帶がやや幅広くなり、縦長に刻まれる。

井戸尻式段階 148～178 148は内折する口唇部上に小波状が連続する口縁部となる。口唇直下には一本の隆線がめぐり、胴部は二本線の隆線によるモチーフが描かれている。器面が荒れているが縄文を地紋としている。149は筒形土器で口縁部に刻みのある隆線の弧文と懸垂文がつくが、地紋は無文である。150は胴部下半から底部にかけての破片で、152と同一個体と思われる。やや幅広隆線により横方向に区画されている。隆線上は棒状工具により横に刻まれ、区画内には縦位の沈線が充填されている。151は内折する無文の口縁部で頸部には隆線がめぐる。隆線はへら状工具で斜めから連続押圧し、D字状の刻みとなっている。153は、強く内折する口縁部で褶曲文がみられる。隆線とその間の深い沈線によって文様を描出している。154は、内折する無文の口縁部で縦位の貼付文がつく。わずかに平となる口唇部上にも貼付文がかかり三叉文が描かれる。155は胴部上半の破片で、頸部の眼鏡状突起を起点に隆線が放射状に描かれる。やや幅広となる隆線には棒状工具による刻みがつき、区画内には縦位沈線や三叉文が充填される。156は直立する無文の口縁部



下に梢円区画文がめぐる。区画内は沈線が沿うのみである。158は内湾する口縁部に粘土紐を二本撲って垂下させている。159、160は口縁部直下の屈曲部につく眼鏡状突起で、159には縄文がみられる。161は幅広隆線による円文とそこから延びる綾杉刻みの隆線からなる。162、163は鎖状隆帯がみられる。164～166は刻みのある隆線とその区画内に縦位沈線がつく。167は交互刺突のある横位の幅広隆線の下には縄文が施される。170は幅広隆帯の上に刺突文および三叉文が施文され、地紋は縦位沈線となる。171は、幅広隆線上に沈線で二分割した片側を交互刺突としている。172は、縄文地紋として刻みのあるややJ字形の幅広隆線となる。173は節の細かい縄文を地紋として幅広の半裁竹管内面による沈線がつく。174は屈折底で縄文がつく。175は横位に縄文が施文される。176、177は縦位に条をもつ縄文。178は無文だが指頭圧痕が著しい。有孔鍔付土器179は鍔の上に沿って横位の変色があり、器面は荒れている。外面は赤褐色だが内面は黒褐色を呈する。

土鉢180は隆線に連続爪形文と角押文がともなう。土鉢としては大きく、中空突起の一部かと思われる。浅鉢181～182 181は短く内折した口縁部上に連続爪形文がめぐる。182は内面をやや厚くした口縁部にやや飛び出る円文がつく。円文脇は二重に厚くして、その間に角押文が施されている。外面は無文である。

曾利式土器

I式 183～192 183は口縁部無文でわずかに内接する。頸部には横位の集合沈線がめぐる。184は器面があれていますが、頸部に交互刺突の隆線がめぐる。185は二本一組の胴部隆線で刻みを持つ。地紋は縦位沈線となる。186～188は頸部破片で、上下に隆線で区画された中を斜格子文が施されるが、186は斜格子片側が隆線となる。188は波状隆線で加飾された区画隆線内を多段の波状隆線がめぐる。189～193は二本一組の胴部隆線に地紋が半裁竹管内面を密にした集合沈線となる。190、192は主文様の隆線を波状隆線で加飾する。

II式 193～198 波状隆線で区画した頸部文様は斜行集合沈線が充填され、胴部は二本一組の胴部文様に波状隆線が延びていく。195～197は幅広の胴部隆帯を半裁竹管内面で分割してその間をなぞることで複数隆帯にみせている。198は口縁部を二本の隆線で横位区画し、中を縦位沈線で充填する。区画内を縦隆線で分割し、そこから蛇行する沈線が垂下する。胴部は縄文が地紋となる。

鉢199 直線的に広がりながら口縁部でいったん内折して立ち上がる。器面は荒れている。

無文の深鉢形土器200～203。202は底部内面の上半部にわずかに焦げが付着した跡がある。202は口縁部がわずかに外反し、外面には縦方向のナデがみられる。203は横方向のナデがみられ、底部はやや内側にまるくなる。201は器台の脚部と思われる。

ミニチュア土器204～207 204は台付鉢で脚部は太く底裏を窪ませている。205はソケット状にくぼみがつけられ、その反対側は剥離痕となっている。土偶の脚部の可能性がある。206は手づくねによる成形で内面底部には6か所の刺突痕がある。207は口唇部をやや厚くつくり、一か所がやや突出する。丸底であるが、内面底部は平たい。

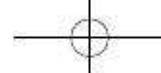
珍品208～210 208は匙状となり把手がのびる。底部外面にわずかな高台をめぐらせるが全体にゆがみが大きい。210は楕形で平底となっている。

器台211～213 211は器面が荒れているがやや粗雑なつくりとなっている。台部底面に擦れた跡は認められない。212は丁寧にみがかれているが擦痕はない。213は器台脚部で、器面は荒れていて、底面に擦痕はない。

土偶

前期 214 バイオリン型の土偶胴部で折面に心棒の痕がある。

中期初頭 216, 217 216は顔の表現がないが頭部を刺突のある粘土紐で巻き込んだ河童型土偶である。後頭部を舌状に厚くしている。胸部は手を広げた板状を呈する。217は一本足の脚部で腹部が大きくまるくふくらみ、背面はややくぼんだ平坦で尻のえぐり部分でハート形となる。胸部には乳房が表現されている。腹部は粘土紐貼付による臍を表現していて中央から垂下する平行沈線が臍で左右に分かれ体側部へつながり、三叉文がつく。平行沈線には連続した刺突がみられる。脚部には文様がないが一本足で自立できる。



中期中葉 215、218～222 215 は土偶の腕で細い棒状となっている。218 は土偶胴部で中央に三列の三角押文がつく。腹部の剥離部には二つの粘土塊がはがれたなめらかにややすくほんだ痕がみられる。220 は土偶脚部先端で刻みにより足指を表現している。

耳飾り 223、224 223 は両面をややすくほませている。224 は土製決状耳飾り片と思われる。

土製円盤 225～227 いずれも無文土器片をまるく成形している。

1号埋甕

五領ヶ台1式土器 228 口縁部上半と底部を欠損し、約 1/3 が残る。口縁部は縦位沈線を地紋として三角印刻文が伴う半裁竹管内面による平行沈線で弧線モチーフが描かれ、三叉文が間にみられる。弧線中央上に橋状把手がつく。頸部は複数段の横位沈線で区画され上端には三角印刻文がつく。胴部は縦位の結節縄文を地紋として、半裁竹管内面による平行沈線で渦巻やひし形、放物線状のモチーフが描かれる。

早期織維土器 229～232 胴部破片で 229 には織維痕が圧痕のように溝状についている。231 は尖底部で外面はていねいに磨かれており、胎土に雲母を含む。内面は器面が荒れていって、底面は剥離している。232 は口縁部下にタガ状隆帯がめぐり口唇部から垂下する隆帯に接する。隆帯上や器面に刻みや文様はみられない。織維を多く含み、229 と 232 に類似した胎土となり、神之木台式と思われる。

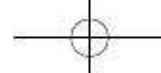
諸磯 b 式土器 233 内接する短い口縁部となり、ゆるい突起をもち、外面には無節縄文が施文される。

五領ヶ台式土器 234、235 234 は低い橋状把手があり、その下端から両方向に刻みの付く隆線が延びる。条線を地紋として三角印刻文がみられる。235 は口縁部に円形貼付文がついて口唇部直下に交互刺突文が並び、弧線文と垂下する三叉文からの文様となる。胎土に雲母を多く含む。

勝坂式土器新道式段階 236、237 隆線脇に幅広の連続爪形文と三角押文が並び、隆線上には刻みがつく。
井戸尻式段階 238～254 238 は口唇部に片側からせり上がる突起がつき、幅広の隆線上を刻む。口唇内面はタガ状に突出する。240 は口唇部が内接することで広い平坦部をもち、眼鏡状把手の上部に沈線文様が施される。口縁部は短く立ち上がり直下で大きくふくらむように屈折する。241 はバケツ状の器形となるもので、口唇部は内側に突出し上端部に平坦面をもつ。口縁部にせまい無文帶をもち、胴部は綾杉状刻みのつく隆線とその間の沈線文で文様を構成する。244 は、幅広の隆線上に刻みや渦巻文様がみられる。245 とともに隆線間に沈線文がみられる。246 は断面三角形状となる隆線で大きな楕円区画文とその中を縦位沈線に交互刺突や綾杉刺突を施す。247 は大きく波状となる押圧隆線とその間に縦位沈線が施される。248 は、やや幅広で高い隆線で楕円区画とし、その中に交互刺突、円形刺突、綾杉刺突による文様がみられる。249 は狭い口縁部無文帶直下に押圧隆線がめぐる。251 は膨らむ無文口縁部下の頸部に刻みの付く隆線がめぐる。252 は沈線にて半肉彫り状の文様としている。253 は塔状突起の上端部で内面と側面に丸窓がつき、頂部には立体的な渦巻文がのる。254 は浅鉢形土器で、内折する口縁部の口唇部を突出させた下に蛇行隆線がめぐる。

曾利 II 式土器 255～274 255、256 は内折する口唇部をもつ長胴甕の無文口縁部で、頸部には波状隆線が、255 には頸部に隆線とともにめぐる。257～260 は口縁部に褶曲文をもつ口縁上部は水平に内折して口唇部は短く直立する。260 は褶曲文土器の頸部に横位疑似隆線がめぐり上端に波状隆線がつく。261 は斜位の疑似隆線による口縁部文様で、口縁上端部は水平に内折して端部に横位隆線がめぐり、頸部には刻みの付く横位隆線がめぐる。262～264 は X 把手甕の頸部にあたり、横 S 字状モチーフの連結を立体的な X 字状とする。265～268 は長胴甕の胴部で 4～6 本の半裁竹管内面で整形された隆線によりモチーフを描出している。269、270 は縄文地紋の上に垂下する隆線がつく。271 は斜位の集合沈線を底部で横位沈線で区画する。272 は横位沈線で区画された胴部に縦位条線を地紋として蛇行する隆線が垂下するものの大半が剥落している。273、274 は内折する口唇部と口縁部を隆線で横位に区画し、その中を縄文地紋にして二本一組の隆線で弧線がめぐり一端が渦巻文となる。274 は無文の口縁部下半と頸部は蛇行隆線が伴う隆線で区画される。275、276 は底部破片で、276 内面は黒色を呈する。

諸磯 b 式獸面突起 277、278 277 は先端の鼻の部分、278 は口縁部下に半裁竹管内面の連続押圧が横位



にめぐる。

土製品 279 棒状に連続爪形文と三叉文がみられ、藤内式期のトロフィー形土器の把手部分と思われる。

ミニチュア土器 280 外面に横位の爪形文が多数つく。

器台 281～284 いずれも器面はやや荒れていて、摩耗状態を認められず、胎土に白書草流が多く含まれる。

土偶 285～291 285 は器面が荒れていて、体部以外を欠損するが、乳房および正中線が隆線となり、背面臀部には沈線の十字文がつく。曾利 I～II 式頃の土偶と思われる。286 は土偶体部で腹部に斜めに剥離した痕があり、腕を胸にあてるポーズ土偶と思われる。287～289 は土偶の腕部、290、291 は土偶脚部。292 は器台のミニチュアのように思われ手づくね痕が認められる。293 は土器片を利用した土製円盤。294 は土製紡錘車で、孔があく。295 は平安時代の坏で底面には削痕がある。297 は台付甕。296 は鉄錢で文字は明確でない。

石器

1～50 は打製石斧、刃部を平坦に仕上げるもののに他にやや丸みを帯びるものがある。石材が薄く剥がれる性質をもつもので刃部を欠損するものも多い。また基部は三角形状にとがらせるものがある。形状はほとんどが短冊形であり、やや刃部が広がる撥形もみられる。

51～53 は磨製石斧、51 は基部を欠損、52 は刃部を欠損する。53 は小型で先端が刃部の一部を欠損している。

54～72 は磨石、形状は四角いもの、細長いもの、円形、球形などがみられる。63 は磨製石斧の可能性がある。55、65、67～69、74、75 などの一面にはくぼみがみられる。66、70 など比熱によりもろくなっているものがみられる。

77、78 は削器、77 は薄い薄片の一辺に刃部をついている。78 は礫皮面がのこる薄片の縁辺部を成形しているが不定形となっている。79 は台石あるいは石皿の破片で、上面に磨り面がのこる。

83～112 は石鎌、ほとんどが黒曜石製で執りを持ち、小型のものがめだつ。83、92、93 は頁岩製、91、94 は水晶製である。144 は頁岩製の石錐である。143 は一部謙遜しているが石匙のようだがつまみが二つみられる。

145 は鉄製品でやや扁平なかたちをしており折損した刀子の柄の可能性がある。

第 2 項 古墳時代・平安時代の遺物

遺物は観察表に記す。

第4章 まとめ

第1節 繩文時代について

調査の都合により、1区・2区と分けて調査した。遺跡全体からみると平成23年度に調査したB区の1区とV区の北側に位置する。E区の調査区西端で確認された人頭大の石は旧河道跡や、それに隣接する谷状部はB区I区北側から続く様子が窺える。これらは、調査区外北側にまだ続いている。この場所から出土土器の大半が検出され、特に表土を剥いだ直後に発見された1号埋甕は、ほぼ完形で検出されている。出土状況が良好であったため、土器中の土壤にも後世の影響が少ないだろうと考え、土壤について脂質分析・土壤化学分析を実施した。土器内の土壤は6つに分けてサンプルとし、土器外の土壤は全体の土層堆積を参考に分層した。分析の結果、土器内の土壤サンプルから脂肪酸は検出されなかった。また、土器内外の土壤サンプルの比較においても、リン酸やカルシウムの富化が推定される状況はみとめられないことから、遺体埋納等の痕跡を示唆することは困難であった。一つの土器の底部を割って、胴部から離した底部を、わざわざ土器の内部に逆さに置き、その上に石を置くという出土状態は、祭祀的な様子を示し、土器の中にある何かを、そこへ残しておきたいという意図が窺える。しかし、今回の結果では、その存在を示すことができなかった。また、谷状部では、他にも埋甕や一個体に復元出来そうな土器の他に、炭化した木材等も出土した。この木材のうち3点について、放射性炭素年代測定と炭化材同定を実施した。その結果、5号配石遺構から出土した資料が、約5,000～4,800年前のクリ材と分析された。他に出土した2点は遺構に伴うものではないが、約5,300～5,000年前の年代が与えられたオニクルミとクリであった。1区・2区とも諸磯b式～曾利II式期の土器が出土している。1区1号埋甕は曾利II式で、5号配石遺構の年代とほぼ一致する。また、1号炉跡と遺物集中3から出土した土器は井戸尻式期であった。2区1号埋甕は、五領ヶ台I式期の土器である。近接する1号住居跡の埋甕の可能性がある。

第2節 古墳時代・平安時代について

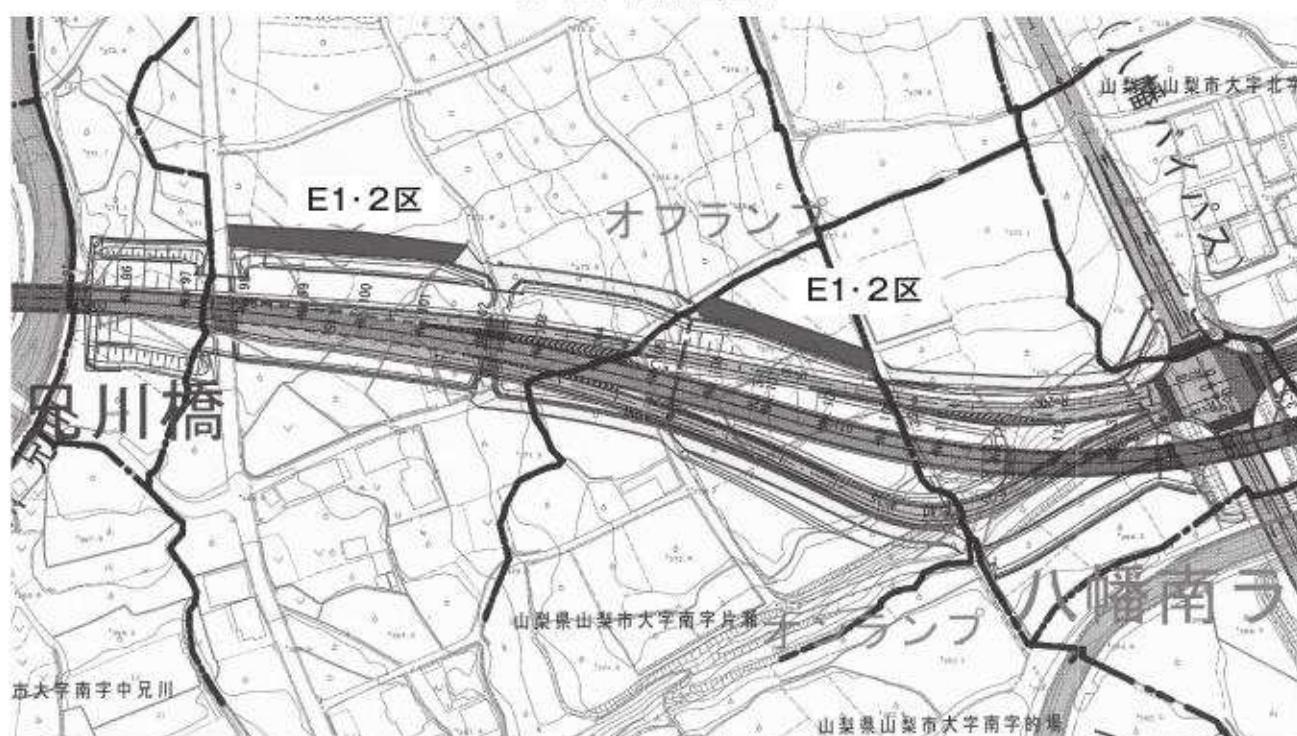
3区・4区とした調査区のうち竪穴建物跡が3軒検出された。1区・2区と同じように、出土した炭化材から放射性炭素年代測定と炭化材同定を実施した。その結果、35号ピット出土資料は、885～985年前の9世紀後半から10世紀後半のクヌギと分析された。35号ピットからは土師器の壊が出土しており、この土師器の年代は同じ時期を考える。35号ピットが検出された3区西側端は、表土から遺構・遺物確認面まで、10cmほどであった。現状が果樹地帯であり、その前は桑畠であったと地元の方に聞いた。近世以降、畠として開墾され続け、少しずつ遺構が削られていったものと考える。3区と4区の堀付近は、遺構の残りも比較的よく、竪穴建物跡が見つかっている。調査区の幅が狭いため、3軒とも、その本体は壁の中であった。竪穴建物跡の周辺には、2号焼土遺構が検出されている。この遺構は、しっかり焼けた焼土と炭化材が含まれる土坑で、中にはS字状台付甕の口縁部とほぼ完形の高壊が埋まっていた。土坑内の炭化材を分析した結果、2世紀前半から4世紀前半頃のコナラとの結果を得た。分析報告にもあるように、遺構の年代の評価にあたっては、古木効果の影響を鑑み、出土遺物の年代観を含めて検討する必要がある。遺物については、脚部が低く、壊部が丸みを帯びて立ち上がる特徴と、S字状台付甕の口縁部が出土していることから、4世紀代の年代観を持ちたい。炭化材の樹種同定から植物利用を考えたところ、古墳時代とされる2号焼土のコナラは燃焼材としての利用があり、火持ちがよいとされている。コナラは、人里周辺に普通に見られる木材で、当時も集落周辺にコナラの植生があつても不思議ではない。

また、平安時代のピットから出土した木材はクヌギであった。ピットは柱穴の可能性もあり、柱材として活用された可能性もある。

国道140号（西関東連絡自動車道）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
調査位置図



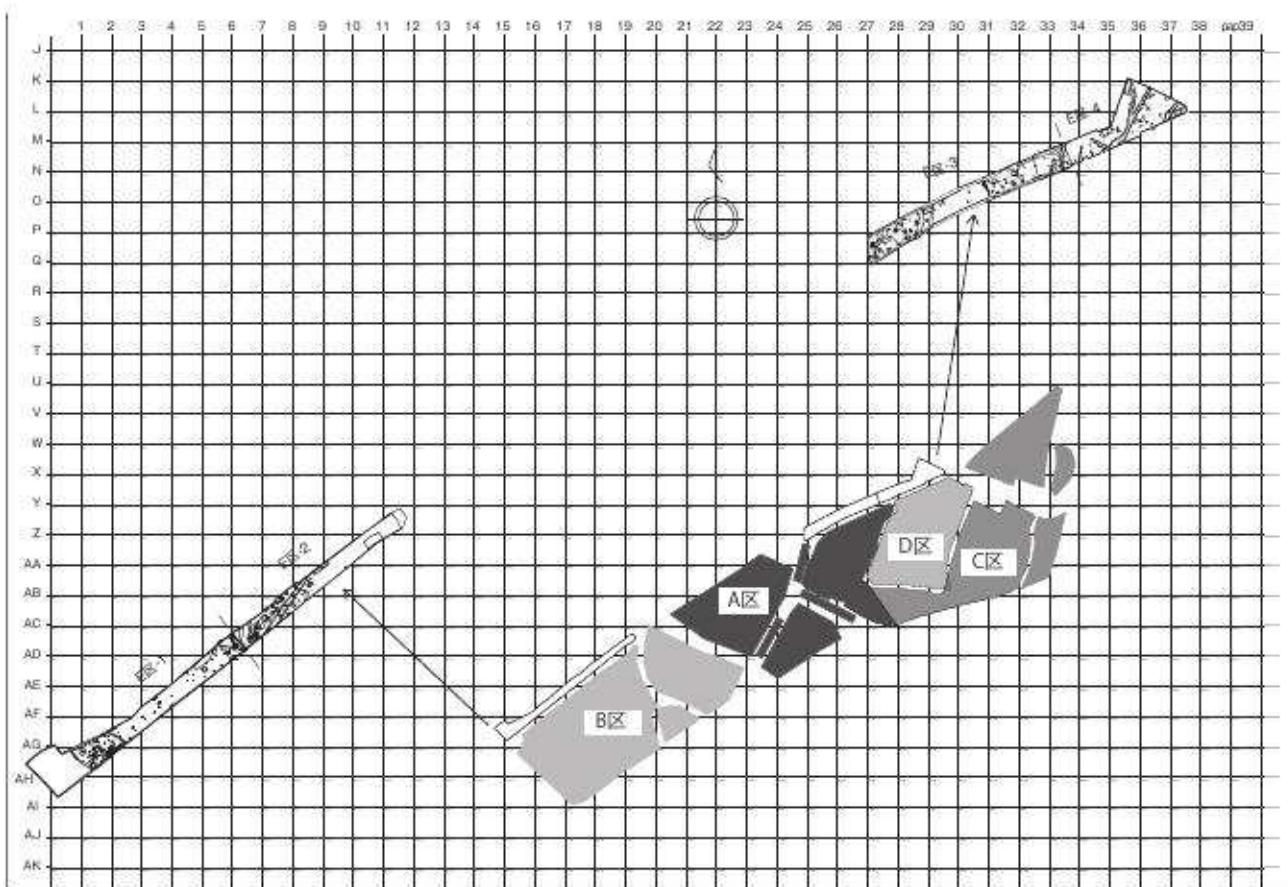
第1図 遺跡位置図



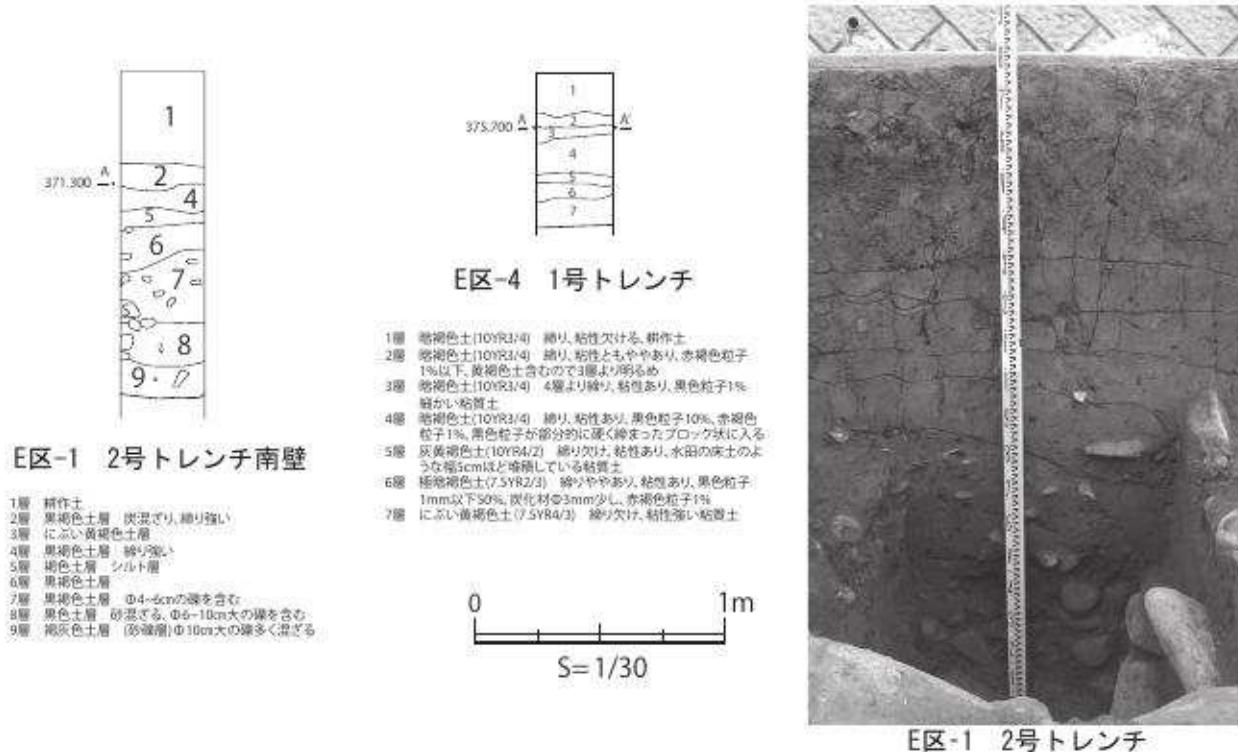
第2図 工事路線図



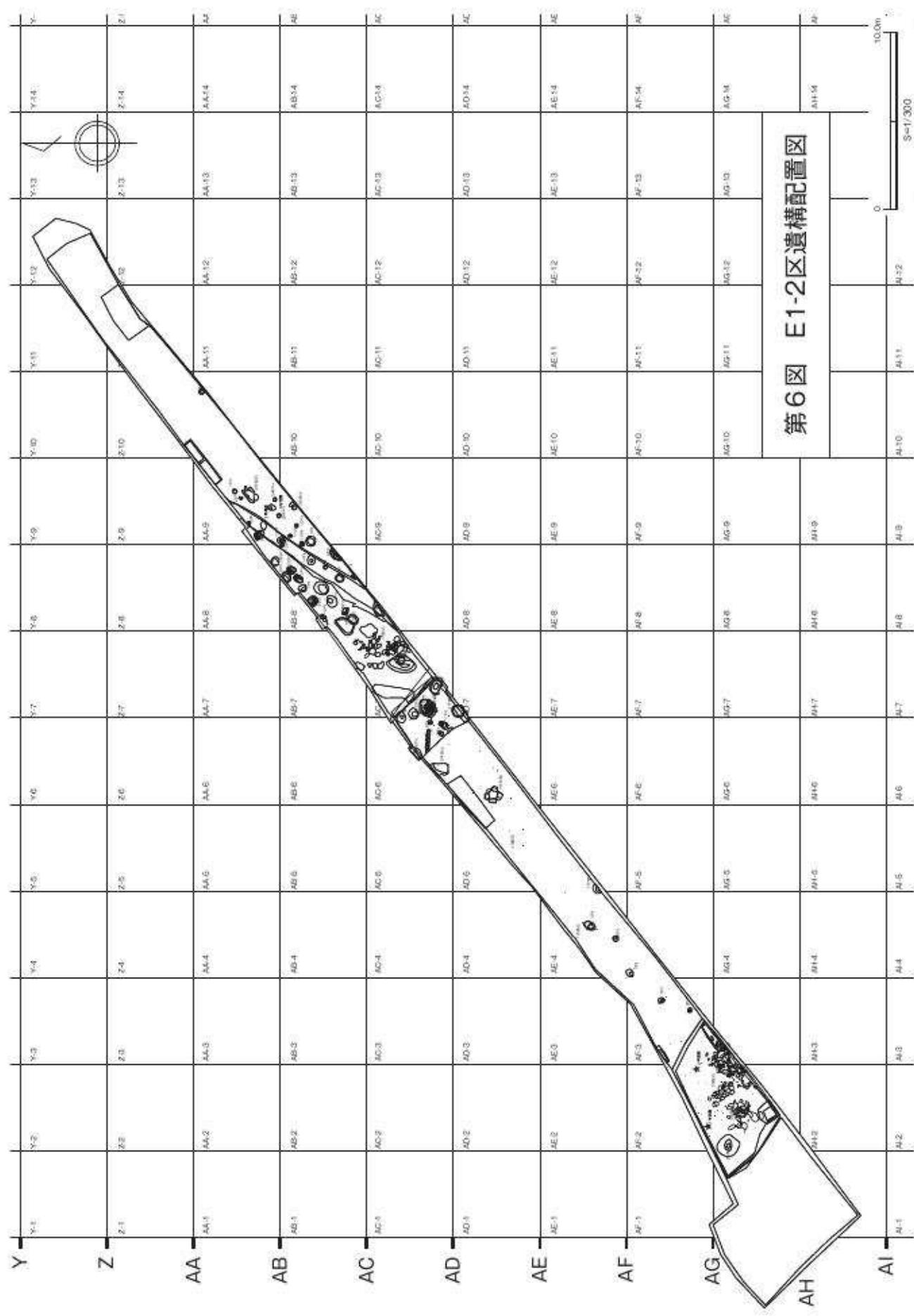
第3図 周辺の遺跡分布図



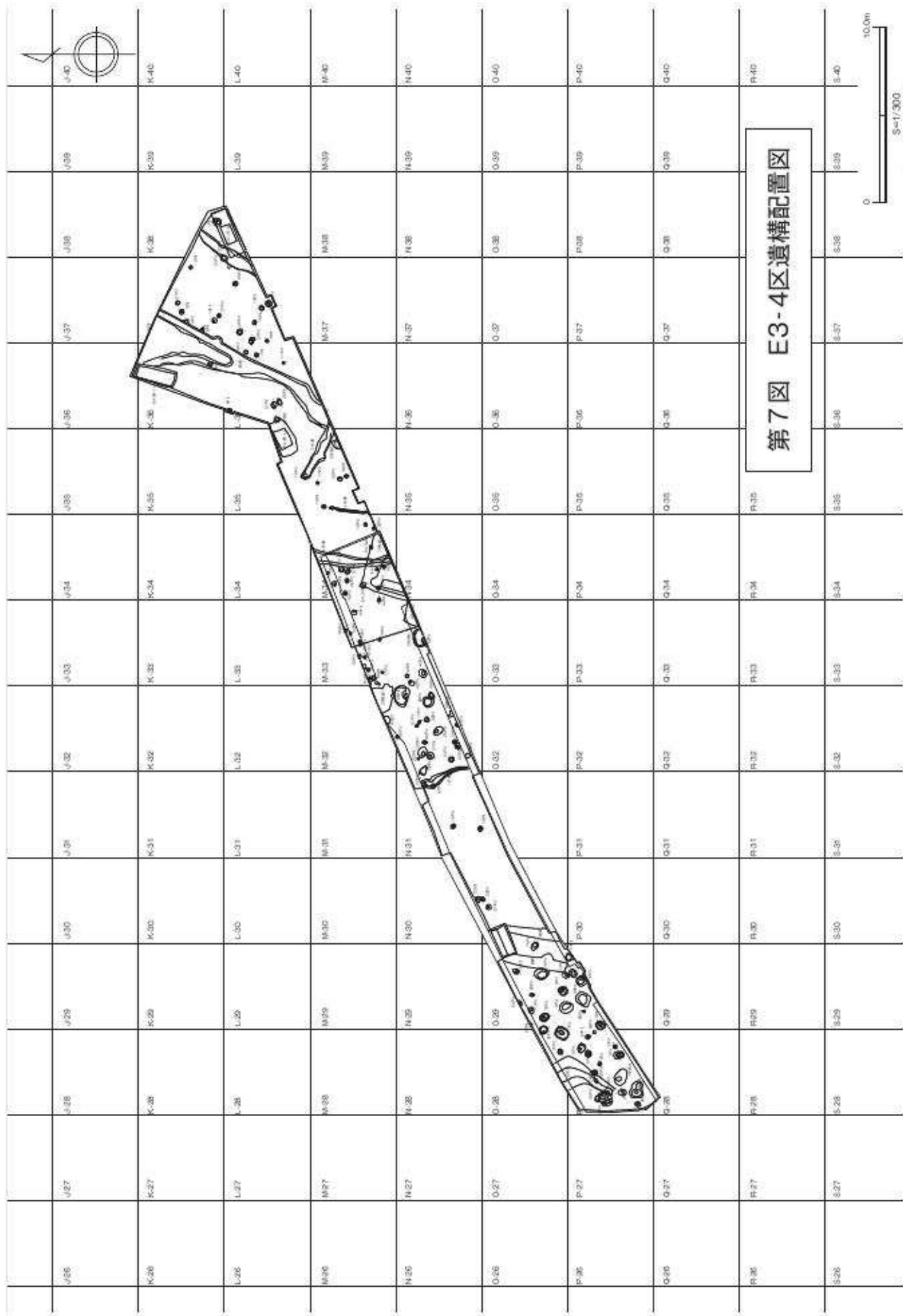
第4図 上コブケ遺跡E区全体図



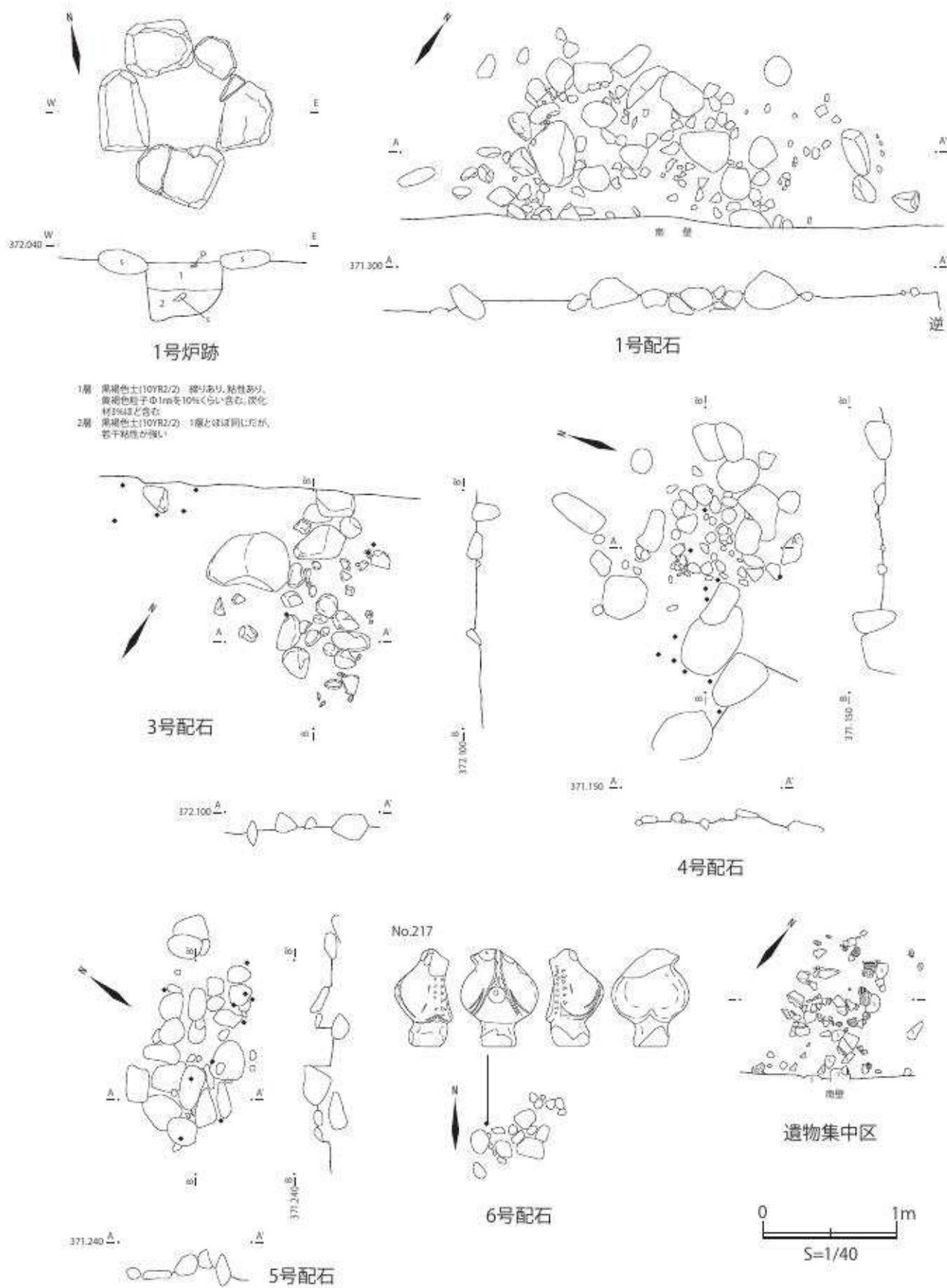
第5図 土層断面図



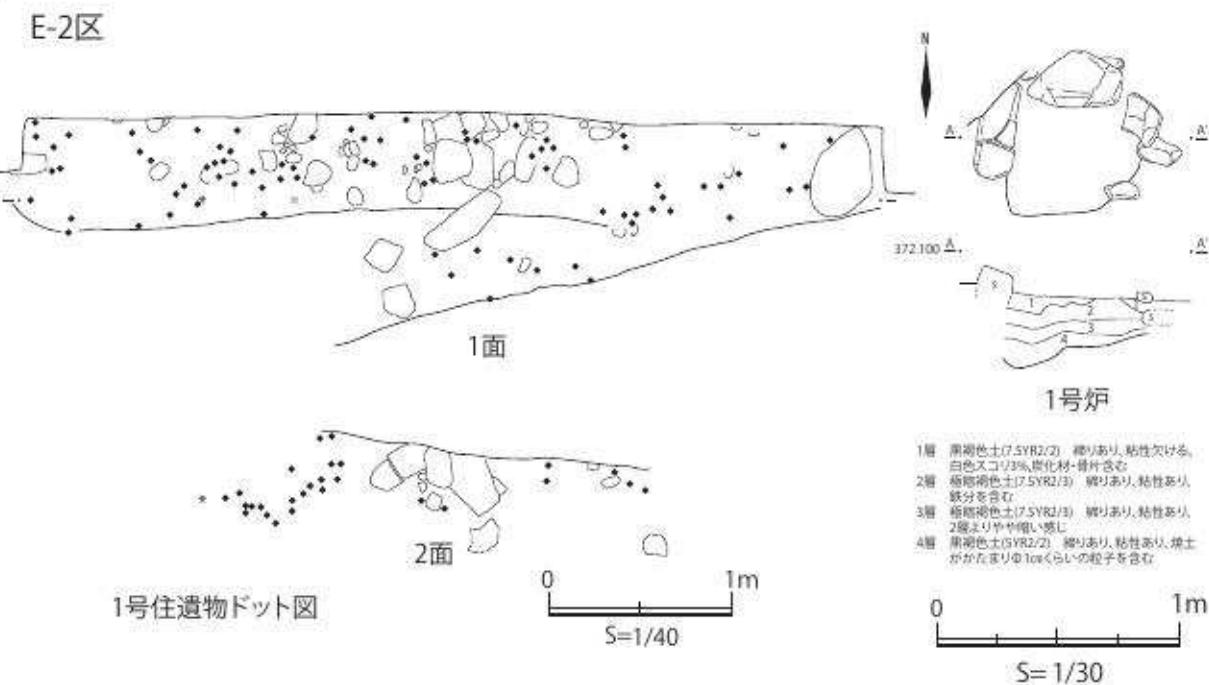
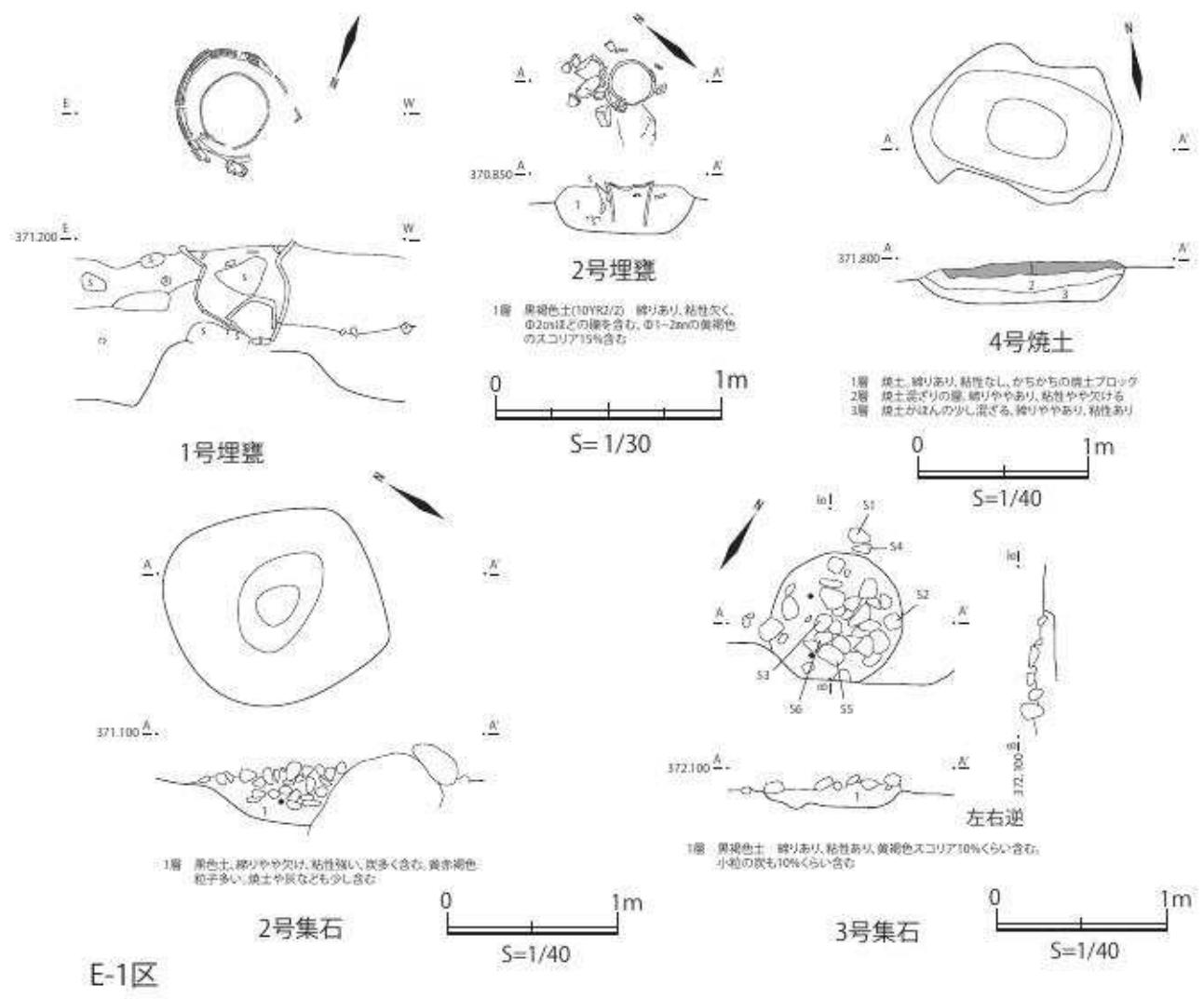
第6図 E1-2区構造配置図



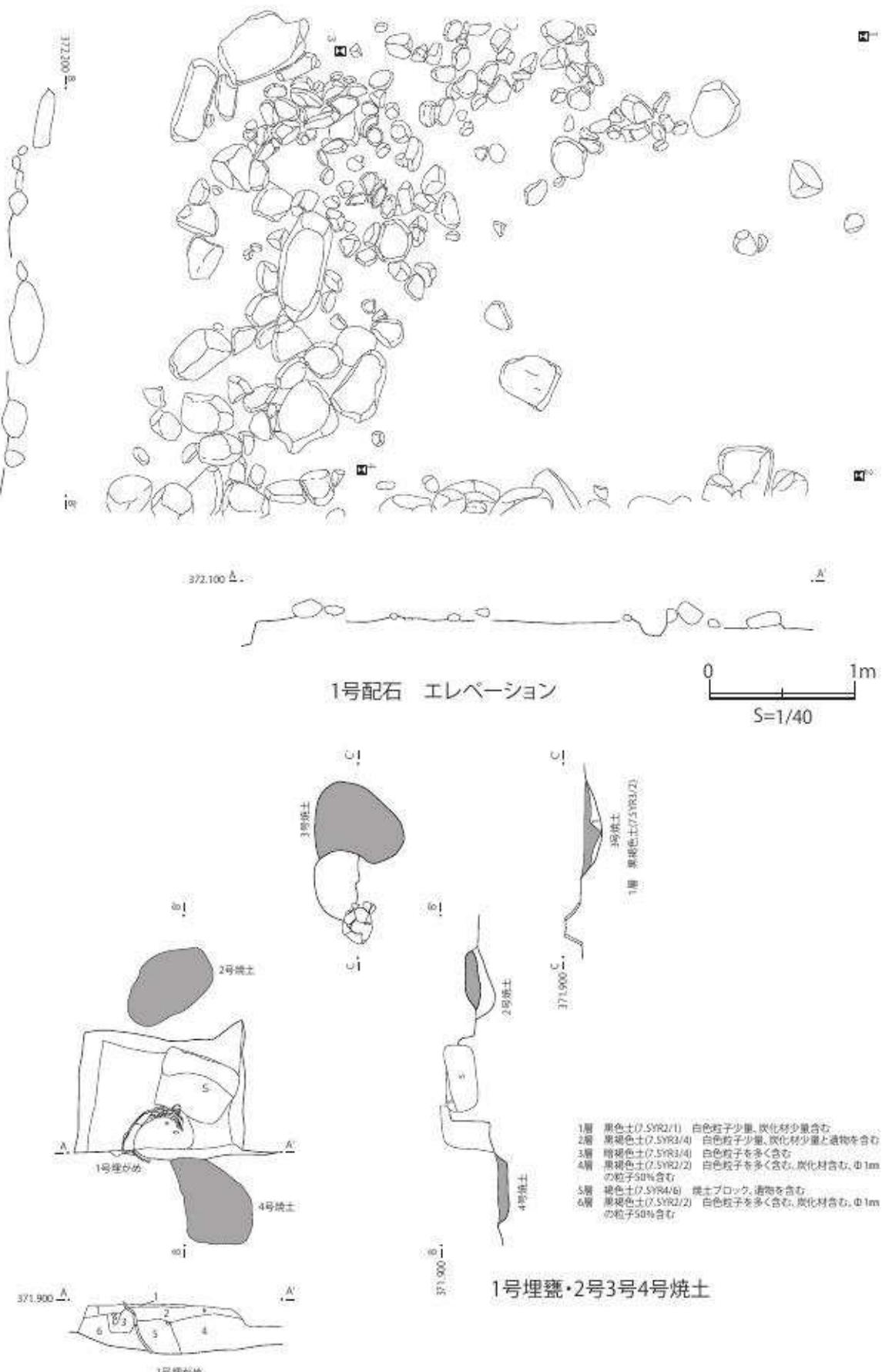
第7図 E3-4区遺構配置図



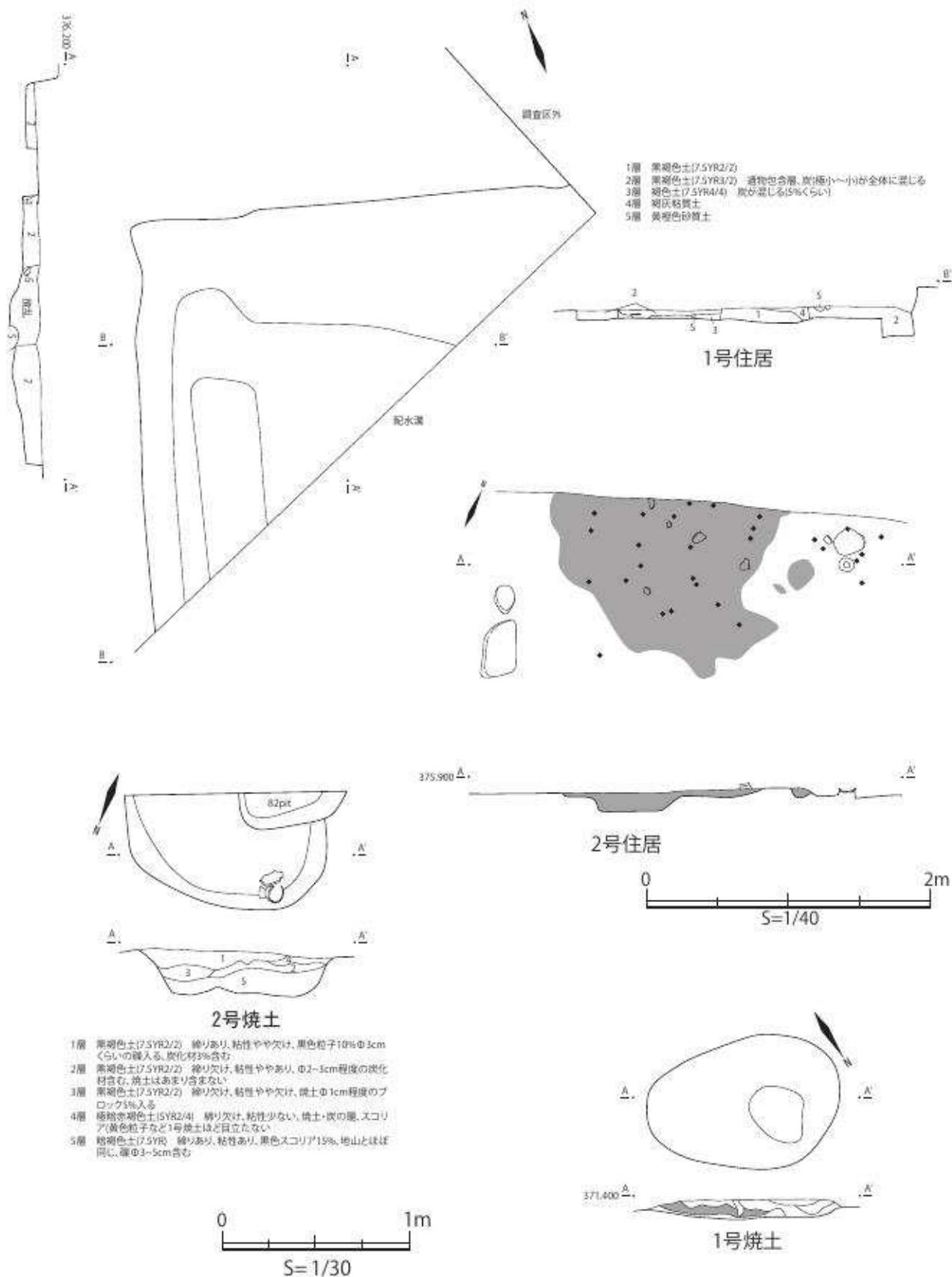
第8図 E-1区遺構図版



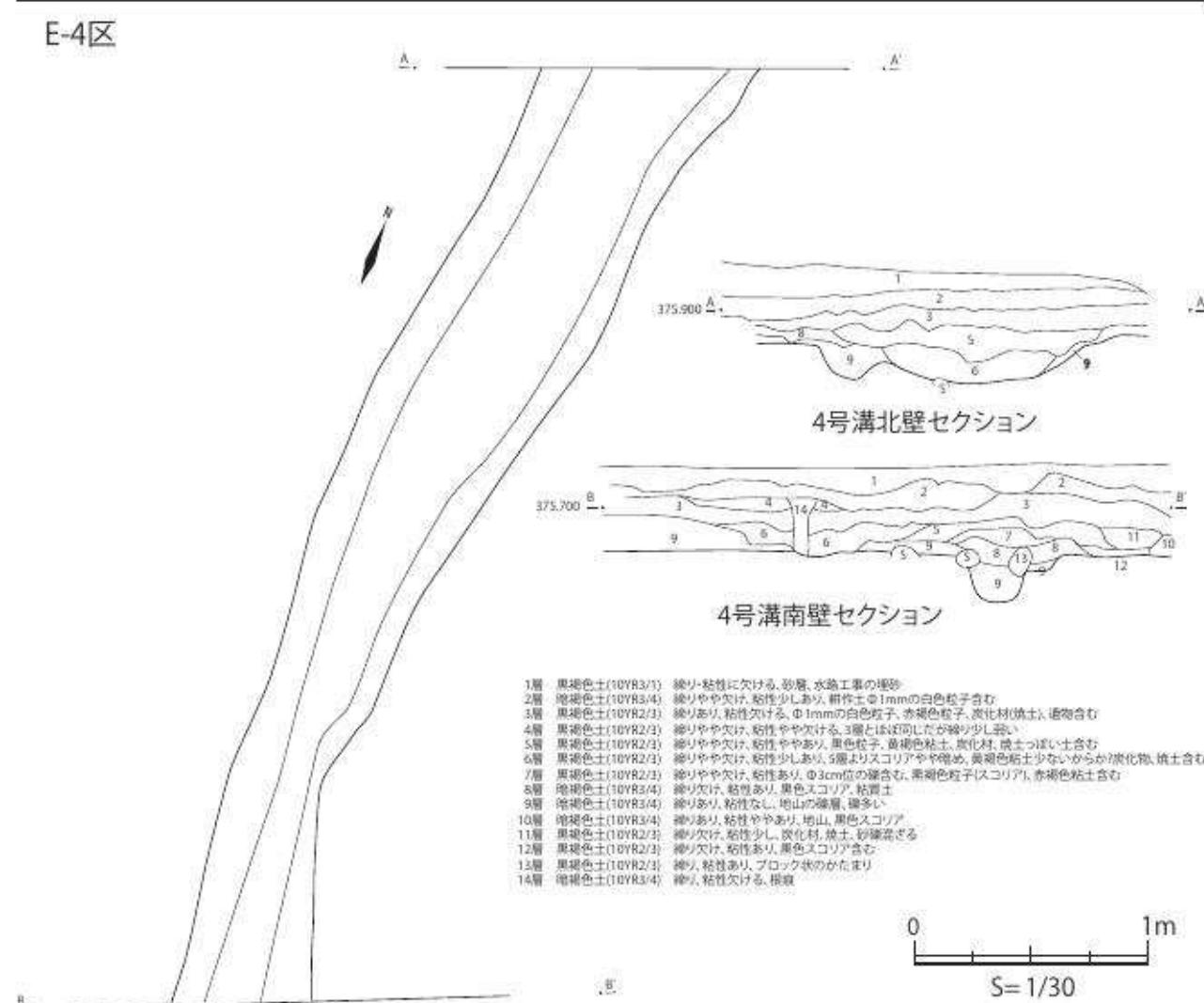
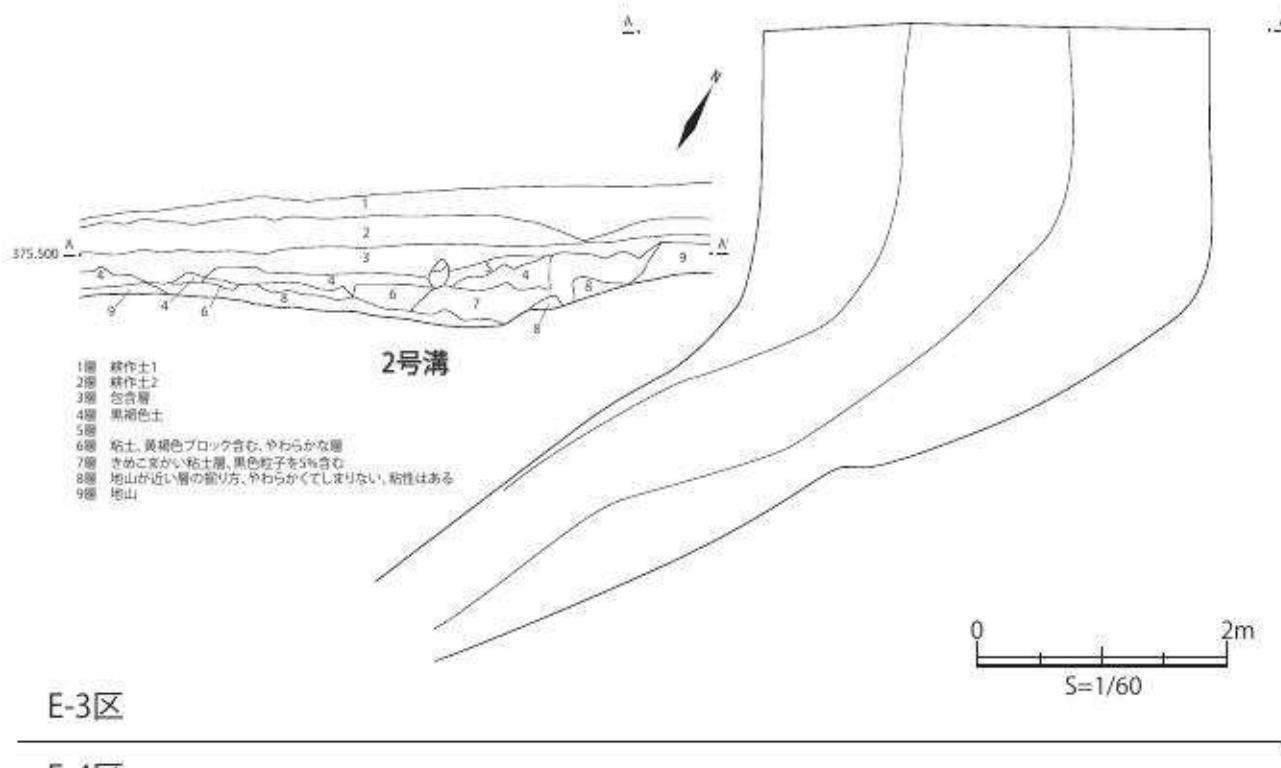
第9図 E-1・2区遺構図版



第 10 図 E-2区遺構図版



第 11 図 E-3 区遺構図版



第12図 E-3・4区遺構図版

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
5001	影差道跡	散布地	平安・中世	5098	前田遺跡	散布地	平安
5002	和田遺跡	散布地	韓文・平安	5099	高ノ上遺跡	散布地	平安
5003	源田金遺跡	散布地	中世	5100	上手原遺跡	散布地	韓文
5004	朝平遺跡	散布地	韓文	5101	美朝遺跡	散布地	平安・中世
5005	杉山遺跡	散布地	韓文・中世	5102	吉坂遺跡	散布地	平安
5006	小掛遺跡	散布地	平安	5103	大橋遺跡	散布地	平安・中世
5007	大工北遺跡	散布地	韓文・古墳・平安	5104	横口遺跡	散布地	古墳・平安・中世
5008	家原遺跡	散布地	平安	5105	河勢氏聚落	その他	中世・近世
5009	芦原遺跡	散布地	平安	5106	新町東遺跡	散布地	韓文
5010	大工南遺跡	散布地	韓文	5107	二ヶ所遺跡	集落跡	平安・中世
5011	市川北遺跡	散布地	韓文	5108	殿木原久保遺跡	散布地	古墳
5012	市川西遺跡	散布地	韓文	5109	東花尾島遺跡	集落跡	韓文・奈良・平安
5013	梅田遺跡	集落跡	韓文	5110	天神前東遺跡	散布地	韓文・平安
5014	於北北遺跡	散布地	平安	5111	高畠遺跡	集落跡	韓文・古墳・平安
5015	神明前遺跡	散布地	平安	5112	櫻木田遺跡	集落跡	平安
5016	大河遺跡	散布地	平安	5113	宗北遺跡	散布地	平安
5017	市川東遺跡	散布地	韓文	5114	宗高南遺跡	散布地	弥生・古墳
5018	切通南遺跡	集落跡	平安	5115	宗高西遺跡	散布地	古墳
5019	堤下遺跡	散布地	平安	5116	天神前北遺跡	散布地	平安
5020	海の水道下遺跡	散布地	韓文・平安	5117	市道遺跡	散布地	平安
5021	村塚遺跡	散布地	韓文	5118	杉ノ木遺跡	集落跡	古墳
5022	丸山遺跡	散布地	韓文	5119	雲林遺跡	散布地	韓文・古墳・平安
5023	大久保遺跡	散布地	韓文・平安	5120	赤木東遺跡	散布地	韓文
5024	切通南遺跡	集落跡	韓文・平安	5121	御敷添遺跡	散布地	韓文・平安・中世
5025	切通東遺跡	散布地	平安	5122	上石森塚遺跡	散布地	韓文・平安
5026	柳原遺跡	散布地	平安・中世	5123	高ノ前遺跡	散布地	平安
5027	中島遺跡	散布地	韓文・平安	5124	上栗木遺跡	散布地	古墳・平安・中世
5028	久保西遺跡	散布地	平安	5125	奥山林遺跡	散布地	韓文・古墳・平安
5029	下河内遺跡	その他	中世・近世	5126	坂ノ内遺跡	集落跡	弥生・平安
5030	於北北遺跡	その他	中世・近世	5127	御頭遺跡	散布地	古墳・中世
5031	西山遺跡	その他の墓	中世・近世	5128	櫻木遺跡	散布地	古墳
5032	切通木遺跡	その他の墓	中世・近世	5129	上之割八子遺跡	散布地	平安
5033	東田遺跡	社寺跡	中世・近世	5130	二ヶ所染木遺跡	散布地	平安
5034	久保遺跡	散布地	平安	5131	鶴木遺跡	散布地	平安
5035	中下西遺跡	散布地	平安	5132	金山遺跡	散布地	平安
5036	萱刈遺跡	散布地	韓文	5133	豊田金桜遺跡	散布地	平安
5037	菅原駒越跡	散布地	韓文・平安	5134	坂張赤塚遺跡	散布地	古墳
5038	添田遺跡	散布地	韓文	5135	松坂東遺跡	散布地	韓文・古墳・飛翔
5039	久坂田遺跡	散布地	韓文	5136	御山堂遺跡	散布地	古墳
5040	江曾涼遺跡	集落跡	韓文・古墳・平安	5137	御来遺跡	散布地	平安
5041	上之ヶヶ遺跡	集落跡	韓文・古墳・平安	5138	上町遺跡	散布地	古墳・平安・中世
5042	又ノ河床遺跡	その他	旧石器	5139	赤田遺跡	散布地	韓文・平安
5043	南野田東遺跡	散布地	平安	5140	船屋町遺跡	散布地	弥生・古墳・平安
5044	天神前遺跡	散布地	韓文・平安・中世	5141	古後遺跡	散布地	平安
5045	南野山西遺跡	散布地	古墳・平安	5142	柳川遺跡	散布地	平安
5046	原ノ前遺跡	散布地	奈良	5143	上石遺跡	散布地	古墳・平安
5047	長原遺跡	散布地	韓文	5144	東小路遺跡	散布地	韓文・平安
5048	唐田遺跡	その他の墓	中世・近世	5145	大林北遺跡	散布地	韓文・弥生・古墳・平安・中世
5049	金根遺跡	散布地	韓文・平安	5146	大林南遺跡	散布地	平安
5050	延命寺遺跡	集落跡	奈生・古墳・平安	5147	中道北遺跡	散布地	平安
5051	千原田塚跡	集落跡	古墳・平安	5148	中道南遺跡	散布地	平安
5052	源慶久保遺跡	散布地	平安	5149	木原西山遺跡	散布地	平安
5053	穴之下遺跡	散布地	中世	5150	黄源寺前古墳	古墳	古墳
5054	桙根遺跡	散布地	平安・中世	5151	鶴谷寺古墳	古墳	古墳
5055	委合市道遺跡	散布地	平安	5152	山寺古墳	古墳	古墳
5056	正徳寺前田遺跡	散布地	平安	5153	天神寺古墳	古墳	古墳
5057	利根遺跡	散布地	平安	5154	泡瀬寺古墳	古墳	古墳
5058	南敷遺跡	散布地	平安・中世	5155	平坂古墳	古墳	古墳
5059	黒之内遺跡	散布地	平安	5156	桶荷寺古墳	古墳	古墳
5060	小守田遺跡	散布地	韓文	5157	沙由無名塚	古墳	古墳
5061	牛座池遺跡	散布地	古墳・平安	5158	牛廢無名塚	古墳	古墳
5062	田原之削遺跡	散布地	平安	5159	木し寺古塚	古墳	古墳
5063	三牧崎遺跡	散布地	平安・中世	5160	岩下古墳群	古墳群	古墳
5064	小武家遺跡	集落跡	平安・中世	5161	山相古墳群	古墳群	古墳
5065	三宝寺遺跡	散布地	平安・中世	5162	高土塚	古墳	近世
5066	カツツ塚遺跡	散布地	平安・中世	5163	御發塚	その他	中世・近世
5067	五鉢等遺跡	散布地	平安	5164	仙沢城跡	城跡	中世
5068	寺の下遺跡	散布地	韓文・古墳・平安	5165	切原の城山跡	城跡	中世
5069	平塚遺跡	散布地	平安	5166	丸山の難火台跡	城跡	中世
5070	坂越遺跡	散布地	古墳・中世	5167	御前山城跡	城跡	中世
5071	松原遺跡	散布地	中世	5168	鶴山の難火台跡	城跡	中世
5072	白下御前院前遺跡	散布地	古墳	5169	白山城跡	城跡	中世
5073	八王子遺跡	集落跡	韓文	5170	野音坂西城跡	城跡	中世
5074	立石遺跡	集落跡	韓文・奈良・平安	5171	武田金吾原敷跡	城跡	中世
5075	白下南遺跡	集落跡	韓文・寄生・奈良・平安・中世	5172	第合御跡	城跡	中世
5076	西久保遺跡	散布地	平安	5173	上野氏原敷跡	城跡	近世
5077	下ノ原遺跡	散布地	韓文	5174	越伊庵原敷跡	城跡	中世
5078	大堀遺跡	散布地	奈良・平安	5175	通方深難	城跡	中世
5079	家ノ前(七日子)遺跡	集落跡	韓文・古墳・奈良・平安	5176	守田義定館跡	城跡	中世
5080	西ノ屋遺跡	散布地	韓文・平安	5177	安田義定館跡	城跡	中世
5081	大神院南遺跡	散布地	平安	5178	高志氏原敷跡	城跡	中世
5082	柳原塚跡	經塚	中世・近世	5179	東添氏原敷跡	城跡	中世
5083	千玉堂遺跡	散布地	奈良・平安	5180	大野塚跡	城跡	中世
5084	中沢遺跡	散布地	平安	5181	御山神塚跡	古跡	平安・中世
5085	神明遺跡	散布地	奈良・平安	5182	富八幡神社	神社	中世
5086	下妙跡遺跡	散布地	韓文・平安	5183	富八幡神社社家坊中群	社寺跡	中世・近世
5087	天神院北遺跡	散布地	韓文・平安	5184	善行堤	堤防遺跡	近世
5088	相模北遺跡	散布地	古墳	5185	田安障壁跡	障壁跡	近世
5089	相模南遺跡	散布地	中世	5186	清水障壁跡	障壁跡	近世
5090	東土遺跡	散布地	古墳・中世	5187	足利源氏跡	集落跡	古墳・平安・中世
5091	新沢遺跡	散布地	中世・近世	5188	奥井遺跡	散布地	韓文
5092	御琴遺跡	散布地	平安	5189	桜木田塚跡	集落跡	韓文・古墳
5093	御屋敷南遺跡	散布地	韓文・平安	5190	越田塚跡	集落跡	古墳
5094	御原敷北遺跡	散布地	平安	5191	御根遺跡	集落跡	平安
5095	御弥陀堂遺跡	散布地	韓文・古墳・奈良・平安	5192	神明前遺跡	社寺跡	中世・近世
5096	天神恩遺跡	散布地	平安	5193	富八幡神社旧社地跡	社寺跡	平安・中世
5097	宮ノ西遺跡	散布地	古墳・中世	5194	福岡川堤防群	その他(堤防跡)	近世・近現代

第1表 周辺の遺跡一覧表

番号	グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	平面の形状	断面の形状
E-T区	1 AE-3	36	32	40	ほぼ円形	剣先型
	2 AF-3	27	23	6.7	ほぼ円形	なべ底型
	3 AF-4	50	40	43	楕円形	剣先型
	4 AE-4	66	47	25	楕円形	なべ底型
	5 AE-4	36	33	5.5	ほぼ円形	剣先型
	6 AC-6	75	43	55	楕円形	なべ底型
	7 AC-6	33	28	36	ほぼ円形	剣先型
	8 AC-6	28	25	25	ほぼ円形	剣先型
	9 AC-6～AC-7	70	55	38	楕円形	すり鉢型
	10 AC-6～AC-7	66	55	54	楕円形	なべ底型
	11 AC-6	60	40	31	楕円形	すり鉢型
	12 AC-7	17	15	—	ほぼ円形	剣先型
	13 AC-7	27	23	—	楕円形	剣先型
E-2区	1 AA-9	29	27	1.3	ほぼ円形	なべ底型
	2 AA-10	37	32	12	ほぼ円形	なべ底型
	3 AC-3	57	52	36	ほぼ円形	剣先型
	4 AB-8～AB-9	80	58	20	ほぼ円形	なべ底型
	5 AB-8	62	41	25	楕円形	剣先型
	6 AB-8	90	34	27	楕円形	なべ底型
	7 AB-8	50	42	31	楕円形	なべ底型
	8 AB-8	61	45	35	楕円形	なべ底型
	9 AA-9	63	47	48	楕円形	—
	10 AB-9	23	22	18	円形	なべ底型
	11 AB-9	26	19	16	楕円形	剣先型
	12 AB-8～AB-9	25	22	9	ほぼ円形	なべ底型
	13 AA-9～AB-9	49	44	31	ほぼ円形	なべ底型
	14 AB-8	58	45	24	楕円形	すり鉢型
	15 AB-8～AB-9	30	28	11	ほぼ円形	すり鉢型
	16 AB-8	28	26	12	円形	すり鉢型
	17 AB-8	55	51	36	ほぼ円形	すり鉢型
	18 AB-8	71	60	45	楕円形	すり鉢型
	19 AB-8	87	75	20	楕円形	すり鉢型
	20 AB-8	53	48	17	ほぼ円形	なべ底型
	21 AB-8	30	23	11	楕円形	剣先型
	22 AB-8	57	45	57	楕円形	剣先型
	23 AA-9～AB-9	28	27	11	円形	剣先型
	24 AA-9	24	22	10	ほぼ円形	剣先型
	25 AA-9	20	20	25	円形	剣先型
	26 AA-9	24	18	4.4	ほぼ円形	なべ底型
	27 AB-8	25	16	16	楕円形	剣先型
	28 AB-8	68	54	25	楕円形	なべ底型
	29 AB-8	50	35	32	楕円形	なべ底型
	30 AC-8	103	38	19	楕円形	なべ底型
E-3区	1 P-28	49	45	44	ほぼ円形	すり鉢型
	2 P-28	27	22	13	ほぼ円形	—
	3 P-28	25	22	15	ほぼ円形	すり鉢型
	4 P-29	60	50	63	楕円形	なべ底型
	5 P-28	40	39	43	ほぼ円形	剣先型
	6 P-28	54	45	43	楕円形	なべ底型
	7 O-28	80	69	54	楕円形	なべ底型
	8 O-29	58	52	56	楕円形	なべ底型
	9 O-29～P-29	80	65	47	楕円形	なべ底型
	10 O-29	58	47	35	楕円形	なべ底型
	11 O-29	38	34	10	ほぼ円形	—
	12 O-29	61	60	47	ほぼ円形	すり鉢型
	13 O-29～P-29	44	32	30	楕円形	剣先型
	14 P-29	51	40	30	楕円形	剣先型
	15 O-29	41	39	34	ほぼ円形	—
	16 O-29	85	68	48	楕円形	なべ底型
	17 N-32	25	18	6	楕円形	—
	18 N-31	30	30	20	円形	なべ底型
	19 N-31	32	25	18	楕円形	—
	20 O-29	27	21	21	楕円形	剣先型
	21 O-30	32	32	11	円形	—
	22 O-30	30	20	14	楕円形	—
	23 N-30	37	34	14	ほぼ円形	—
	24 N-32	35	32	11	ほぼ円形	なべ底型
	25 N-32	36	35	28	ほぼ円形	なべ底型
	26 N-32	62	40	17	楕円形	なべ底型
	27 N-32	44	40	22	ほぼ円形	すり鉢型
	28 N-32	65	60	33	楕円形	なべ底型
	29 N-32	27	23	27	ほぼ円形	剣先型
	30 N-32	32	30	20	ほぼ円形	—
	31 O-28	34	31	34	ほぼ円形	剣先型
	32 O-28～O-29	53	45	45	楕円形	なべ底型
	33 P-29	87	70	65	楕円形	なべ底型
	34 P-28	36	29	6	楕円形	すり鉢型
	35 P-28	103	78	20	楕円形	なべ底型
	36 P-28	48	38	30	楕円形	—
	37 P-28	89	70	37	楕円形	なべ底型
	38 P-28	37	30	21	楕円形	すり鉢型
	39 N-32	63	56	20	楕円形	なべ底型
	40 N-32	44	34	18	楕円形	なべ底型
	41 N-33	53	44	17	円形	なべ底型

番号	グリッド	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	平面の形状	断面の形状
	42 N-33	37	27	20	楕円形	剣先型
	43 N-33	23	23	13	円形	—
	44 M-33～34	28	23	28	ほぼ円形	なべ底型
	45 M-34	25	25	14	円形	すり鉢型
	46 M-34	25	24	16	ほぼ円形	剣先型
	47 M-34	36	30	—	楕円形	剣先型
	48 P-28	40	29	22	楕円形	—
	49 M-33	25	20	15	ほぼ円形	剣先型
	50 M-33	20	20	—	円形	なべ底型
	51 M-33	26	14	13	楕円形	なべ底型
	52 M-33	23	21	5	ほぼ円形	なべ底型
	53 M-33	20	18	5	ほぼ円形	なべ底型
	54 M-33	19	13	16	楕円形	剣先型
	55 M-34	30	28	30	ほぼ円形	剣先型
	56 M-34	18	17	—	ほぼ円形	すり鉢型
	57 M-34	28	25	15	ほぼ円形	すり鉢型
	58 M-34	21	18	9	ほぼ円形	剣先型
	59 N-32	17	12	10	楕円形	剣先型
	60 N-32	30	24	8	楕円形	なべ底型
	61 N-32	21	18	8	ほぼ円形	—
	62 N-31	32	29	27	ほぼ円形	—
	63 O-29	20	8	—	楕円形	剣先型
	64 O-29	39	15	30	楕円形	剣先型
	65 N-32	120	90	8	楕円形	なべ底型
	66 N-32	22	20	5	ほぼ円形	すり鉢型
	67 P-28	32	26	17	楕円形	すり鉢型
	68 P-28	18	18	47	円形	剣先型
	69 P-29	22	15	13	楕円形	—
	70 欠番	—	—	—	—	—
	71 O-29～P-29	44	42	19	ほぼ円形	なべ底型
	72 N-31	41	23	35	楕円形	—
	73 P-28	50	22	15	楕円形	すり鉢型
	74 P-28	30	19	21	楕円形	すり鉢型
	75 O-29	53	35	36	楕円形	なべ底型
	76 M-33	20	16	20	ほぼ円形	剣先型
	77 M-33	17	15	6	ほぼ円形	なべ底型
	78 N-31～N-32	62	36	14	楕円形	なべ底型
	79 欠番	—	—	—	—	—
	80 M-33	31	28	12	ほぼ円形	なべ底型
	81 M-33	21	15	12	楕円形	なべ底型
	82 N-33	56	20	29	楕円形	なべ底型
	83 M-32	50	32	—	楕円形	—
	84 N-32	26	17	8	楕円形	剣先型
	85 N-32	30	28	—	ほぼ円形	—
	86 M-33	23	17	16	ほぼ円形	すり鉢型
	87 M-33	34	30	17	ほぼ円形	すり鉢型
E-4区	1 K-38	52	44	20	楕円形	なべ底型
	2 K-37	20	18	15	ほぼ円形	剣先型
	3 K-37	30	28	24	ほぼ円形	剣先型
	4 K-37	35	20	16	ほぼ円形	剣先型
	5 L-36	28	22	10	ほぼ円形	なべ底型
	6 L-36	26	26	10	円形	なべ底型
	7 L-36	23	22	15	円形	なべ底型
	8 K-37	25	22	10	楕円形	なべ底型
	9 L-37	24	22	12	ほぼ円形	剣先型
	10 L-37	28	23	25	楕円形	剣先型
	11 L-36	19	16	10	ほぼ円形	なべ底型
	12 L-37	37	36	16	円形	なべ底型
	13 L-37	31	30	20	円形	剣先型
	14 K-37	30	30	28	円形	剣先型
	15 K-36	27	20	10	楕円形	剣先型
	16 L-35	38	32	10	楕円形	なべ底型
	17 M-35	20	16	6	楕円形	剣先型
	18 M-35	24	22	10	ほぼ円形	なべ底型
	19 M-34	23	18	12	楕円形	なべ底型
	20 M-34	20	16	8	楕円形	なべ底型
	21 L-36	48	40	12	楕円形	なべ底型
	22 K-37～L-37	43	37	32	楕円形	剣先型
	23 K-38	12	10	17	ほぼ円形	剣先型
	24 L-37	45	28	18	楕円形	なべ底型
	25 L-37	37	33	19	楕円形	なべ底型
	26 L-36	42	24	6	楕円形	なべ底型
	27 K-37	24	22	6	ほぼ円形	なべ底型
	28 L-37	28	28	10	円形	なべ底型
	29 M-36	32	25	10	楕円形	なべ底型
	30 M-35	25	20	2	ほぼ円形	なべ底型
	31 K-37	30	30	6	円形	なべ底型
	32 M-34	23	20	12	ほぼ円形	なべ底型
	33 M-34	18	15	3	ほぼ円形	なべ底型
	34 M-34	46	28	16	楕円形	なべ底型
	35 M-34	33	28	12	ほぼ円形	なべ底型

第2表 ピット一覧表

回数	番号	遺構	出土地点	時期	種別	器種	重量		色調	断土	焼成	特徴		残存率	部位	注記	備考	実測番号
52	1 1号住	E-3区	9C 前半	土師器	甕	(11.0)	3.0 (4.8)	褐色	赤色・白色粒子	良好	4分5厘		回転市牛 底脚	口縁部～ 底脚	1住 P42		303	
52	2 1号住	E-3区	9C 中～ 後半	土師器	甕	(14.4)	4.3 (6.0)	褐色	赤色・白色・黑色粒子	良好	6分5厘			口縁部～ 底脚	1住 P20		302	
52	3 1号住	E-3区	9C 中～ 後半	土師器	甕	11.0	4.2 4.4	褐色	赤色・白色・黑色粒子	良好	6分5厘			口縁部～ 底脚	1住 P44・57・ 55ピット一括		301	
52	4 1号住	E-3区	9C 中～ 後半	土師器	甕	(14.9)	(3.6)	—	褐色	赤色粒子	良好	6分3厘			口縁部～ 底脚	1住 P59		304
52	5 1号住	E-3区	9C 中～ 後半	土師器	甕	(11.8)	(2.8)	—	褐色	赤色・白色・黑色粒子	良好	4分5厘			口縁部～ 底脚	1住 P28		305
52	6 1号住	E-3区	9C 前半	土師器	甕	12.8	2.3 5.4	褐色	赤色・白色粒子	良好	4分5厘		80%	口縁部～ 底脚	1住 P36		307	
52	7 1号住	E-3区	9C 中～ 後半	土師器	甕	(13.1)	2.0 5.9	褐色	赤色・白色粒子	良好	4分5厘		60%	口縁部～ 底脚	1・住 P8・38・ 47		307	
52	8 1号住	E-3区	9C 中～ 後半	土師器	皿	(11.9)	2.35 4.8	褐色	赤色・白色粒子	良好	4分5厘			口縁部～ 底脚	1住 P45		309	
52	9 1号住	E-3区	9C 中～ 後半	土師器	高台付环	—	(0.9) (7.0)	褐色	赤色・白色粒子	良好	4分5厘			底脚	1住 P30		306	
52	10 1号住	E-3区	9C 中～ 後半	土師器	蓋	—	(1.3)	—	褐色	白色粒子	良好	ナテ	ナテ		口縁部破 片	1住 P18		310
52	11 1号住	E-3区	9C 中～ 後半	土師器	甕	(21.6)	(2.7)	—	明赤褐色	白色・黒色粒子・ 金雲母	良好	タテハケ	ヨコハケ		口縁部～ 底脚	1住 P14		312
52	12 1号住	E-3区	9C 中～ 後半	土師器	甕	(11.0)	(2.7)	—	黒褐色	白色粒子・金雲 母	良好		ヨコハケ		口縁部～ 底脚	1住 P37		317
52	13 1号住	E-3区	9C 中～ 後半	土師器	蓋	—	(2.1)	—	褐色	白色・黒色粒子・ 金雲母	良好	ナテ	ナテ		口縁部破 片	1住 P29		313
52	14 1号住	E-3区	9C 中～ 後半	土師器	蓋	—	3.2	—	褐褐色	白色・兩色粒子	良好	ナテ	ヨコハケ		口縁部破 片	1住 P31		315
52	15 1号住	E-3区	9C 中～ 後半	土師器	蓋	—	7.5	—	赤褐色	白色・黒色粒子・ 金雲母	良好	タテハケ	ヨコハケ		側壁破片	1住一括		316
52	16 1号住	E-3区	9C 中～ 後半	土師器	蓋	—	2.5 (6.4)	灰褐色	白色・黒色粒子・ 金雲母	良好			木葉模	側部下～ 底脚	1住 P13		318	
52	17 1号住	E-3区	9C 中～ 後半	土師器	甕	—	2.1 (8.0)	灰褐色	白色・黒色粒子・ 金雲母	良好	ヨコハケ	タテハケ	木葉模	底脚破片	1住一括		319	
52	18 1号住	E-3区	9C 中～ 後半	須恵器	甕	(20.0)	1.4	—	灰色	白色粒子	良好	ナテ	ナテ		口縁部破 片	1住周辺一括		325
52	19 1号住	E-3区	9C 中～ 後半	須恵器	甕	—	13.5	—	灰褐色	白色・兩色粒子・ 小石	良好	タタキ	ナテ		側部破片	1住一括		322
52	20 1号住	E-3区	9C 中～ 後半	須恵器	甕	—	13.2	—	灰褐色	白色・黒色粒子	良好	タタキ	当真痕		側部	1住 P34・35		321
52	21 1号住	E-3区	9C 中～ 後半	須恵器	甕	—	5.2	—	灰褐色	白色粒子	良好	タタキ	ナテ		側部破片	1住一括		323
52	22 1号住	E-3区	9C 中～ 後半	灰釉陶器	高台付环	—	2.45 (8.4)	灰白色	黑色粒子	良好	ロクロ	ロクロ	高台付		底脚	1住 P21		320
53	23 2号住	E-3区	平安	土師器	甕	10.9～ 11.3	3.0 5.6	明褐色	赤色・白色粒子	良好	ナテ	ナテ	回転ヘラ	90%	口縁部～ 底脚	2住 P31	内寸寸 引付	326
53	24 2号住	E-3区	平安	土師器	甕	(10.8)	2.8 6.0	黄褐色	赤色・白色粒子	良好			回転ヘラ		口縁部～ 底脚	2住 P10・一括		329
53	25 2号住	E-3区	平安	土師器	甕	(12.4)	2.45 (5.6)	褐色	赤色・白色粒子	良好				40%	口縁部～ 底脚	2住 P2・3・7・ 85ピット P3		328
53	26 2号住	E-3区	平安	土師器	甕	(10.0)	1.7	—	明赤褐色	赤色粒子	良好				口縁部破 片	2住 P71		330
53	27 2号住	E-3区	平安	土師器	甕	(11.6)	2.05 5.2	明赤褐色	赤色・白色粒子	良好				55%	口縁部～ 底脚	2住 P23		336
53	28 2号住	E-3区	平安	土師器	皿	(11.8)	1.7 5.4	褐色	赤色・白色・黑 色粒子	良好			回転糸切 り	30%	口縁部下～ 底脚	2住 P38・72・ 73		334
53	29 2号住	E-3区	平安	土師器	鉢	—	6.1	—	赤褐色	黑色粒子	良好	ナテ	ナテ		口縁部下～ 底脚	2住一括		327
53	30 2号住	E-3区	平安	土師器	甕	—	0.9 (5.6)	褐色	赤色・白色粒子	良好			回転ヘラ		底脚	2住 P19・36		331
53	31 2号住	E-3区	平安	土師器	甕	—	1.8 (4.4)	褐色	赤色粒子	良好			回転ヘラ		底脚	2住 P25		332
53	32 2号住	E-3区	平安	土師器	甕	—	0.85 (5.7)	褐色	赤色・兩色粒子	良好			回転ヘラ	10%	底脚破片	2住 P23		335
53	33 2号住	E-3区	平安	土師器	甕	—	2.2	—	褐色	白色・黒色粒子・ 金雲母	良好	面取刃			口縁部破 片	2住 P62		340
53	34 2号住	E-3区	平安	土師器	甕	—	3.6	—	明赤褐色	白色・黒色粒子・ 金雲母	良好			口縁部破 片	2住 P66		337	
53	35 2号住	E-3区	平安	土師器	甕	—	2.7	—	明赤褐色	白色・黒色粒子	良好	面取刃	ナテ		口縁部破 片	2住 P67		339
53	36 2号住	E-3区	平安	土師器	甕	—	2.5 (4.8)	明褐色	赤色粒子	良好					底脚	2住 P74		333
53	37 2号住	E-3区	平安	土師器	甕	—	1.6 (6.8)	明褐色	白色・黒色粒子・ 金雲母	良好	ヨコハケ	タテハケ	木葉模		底脚	2住 P59		342
53	38 2号住	E-3区	平安	土師器	甕	—	3.3 (8.6)	黄褐色	白色・兩色粒子	良好	ヨコハケ	タテハケ	木葉模		底脚	2住 P16		341
53	39 2号住	E-3区	平安	須恵器	甕	—	7.0	—	灰褐色		良好	タタキ	ナテ		側壁	2住 P22		344
53	40 2号住	E-3区	平安	灰釉陶器	甕	(18.0)	4.1	—	灰白色		良好	ロクロ	ロクロ		口縁部～ 底脚	2住 P9・6B		343
53	41 2号住	E-3区	平安	灰釉陶器	甕	—	2.4	—	オリーブ 灰		良好	花弁文			口縁部破 片	2住一括		345
53	42 4号住	E-3区	平安	土師器	甕	—	2.25 (4.5)	黄褐色	赤色・白色・黑 色粒子	良好					体部～底 部	4住一括		346
53	43 4号住	E-3区	平安	土師器	甕	—	1.0 (4.4)	褐色	赤色・白色粒子	良好					底脚	4住 P2		347
53	44 1号溝	E-3区	古墳時代	土師器	高环?	—	1.5 (13.4)	明赤褐色	白色・黒色粒子	良好	ナテ	ナテ			側壁	1溝 P2	円形内通 丸	375
53	45 1号溝	E-3区	古墳時代	土師器	高环?	—	3.3	—	明赤褐色	白色・黒色粒子	良好				側壁	1溝北壁一括		378
53	46 1号溝	E-3区	古墳時代	土師器	甕	—	3.6	—	灰黄褐色	白色・黒色粒子・ 金雲母	良好	ハケ			側壁	1溝 P1		376
53	47 1号溝	E-3区	古墳時代	土師器	甕	—	5.4	—	反黄褐色	白色・黒色粒子・ 金雲母	良好	ハケ			側壁	1溝北壁一括		377
54	48 1号燒土	E-3区	古墳時代	土師器	甕	(26.0)	3.9	—	赤褐色	白色・黒色粒子・ 金雲母	良好	ヨコハケ	タテハケ		口縁部	1焼 P2		380
54	49 1号燒土	E-3区	古墳時代	土師器	甕	—	3.7	—	暗赤褐色	白色・黒色粒子・ 金雲母	良好	タテハケ			側壁	1焼 P3		381
54	50 2号燒土	E-3区	古墳時代	土師器	高环	11.7	6.9 7.0	明褐色	赤色・白色・黑 色粒子	良好	ヨコハケ	ヨコハケ			口縁部～ 底脚	2號 P2		384

固番	番号	遺構	出土地点	時期	種別	器種	重量	寸法	色調	胎土	焼成	特徴			残存率	部位	注記	備考	実測番号
						口沿	高さ	底径			外面	内面	底脚						
54	51	2号焼土	E-3区	古墳時代	土師器	S字口縁 裏	(18.0)	5.2	—	褐色	白色・赤色粒子・ 金銀母	良好	タテハケ	ナデ		口縁部～2枚P1-E3- 柄部	P30-P31		385
54	52	2号焼土	E-3区	古墳時代	土師器	S字口縁 裏	—	5.2	—	赤褐色	白色・黒色粒子	良好	タテハケ			柄部破片	2枚P4		386
54	53	2号焼土	E-3区	古墳時代	土師器	S字口縁 裏	—	4.0	7.6	褐色	白色・赤色粒子・ 金銀母	良好				台部	2枚一筋		388
54	54	2号焼土	E-3区	古墳時代	土師器	裏?	—	4.5	—	暗反黄色		良好				柄部	2枚P5-P6		382
54	55	8号ビック ト	E-3区	古墳時代	土師器	高环	—	8.0	—	明褐色	白色・白色・黑 色粒子	良好				柄部	8ビックP2-1B ビックト一筋		348
54	56	14号ビック ト	E-3区	古墳時代	土師器	裏	—	2.5 (6.2)	—	灰黄褐色	白色・黒色粒子・ 金銀母	良好				底部	14ビックP2		349
54	57	15号ビック ト	E-3区	古墳時代	土師器	裏	—	1.65 (5.4)	—	明褐色	白色・黒色粒子	良好				底部	15ビックト		351
54	58	15号ビック ト	E-3区	古墳時代	土師器	裏	—	2.1	—	黄褐色	白色・黒色粒子・ 金銀母	良好				柄部～台 部	15ビックP2		350
54	59	16号ビック ト	E-3区	古墳時代	土師器	裏	—	2.1	—	褐色	白色・白色・黑 色粒子	良好				柄部～台 部	15ビックP1		353
54	60	16号ビック ト	E-3区	古墳時代	土師器	裏	—	2.3	—	暗赤褐色	白色・白色・黑 色粒子	良好				口縁部	16ビックP2		352
54	61	25号ビック ト	E-3区	古墳時代	土師器	裏	—	4.0	—	褐色	白色粒子・金銀 母	良好	タテハケ	压痕		柄部破片	25ビックP1- P2		354
54	62	34号ビック ト	E-3区	平安	土師器	外	10.7	4.4	5.6	褐色	白色・黒色粒子・ 金銀母	良好	ナデ	ナデ	回転赤切 り	口縁部～34ビックP1- 柄部	3往一筋		355
55	63	35号ビック ト	E-3区	平安	土師器	外	(13.6)	4.45	(6.1)	橙色	白色・赤色粒子	良好	ナデ	ナデ		口縁部～ 底部	35ビックP18		356
55	64	35号ビック ト	E-3区	平安	土師器	外	(13.6)	1.7	—	明褐色	白色・黒色粒子	良好				口縁部～ 体部	35ビックP12		358
55	65	35号ビック ト	E-3区	平安	土師器	高台付环	—	2.9 (6.5)	—	明赤褐色	白色・黒色粒子	良好				体部～底 部	35ビックP17- 3往一筋		360
55	66	35号ビック ト	E-3区	平安	土師器	外	—	2.1	—	褐反色	白色・黒色粒子	良好				口縁部～ 体部	35ビックP26		359
55	67	35号ビック ト	E-3区	平安	土師器	外	(12.8)	3.05	—	明赤褐色	白色・赤色粒子	良好				口縁部～ 体部	3往一筋		357
55	68	35号ビック ト	E-3区	平安	土師器	裏	(16.8)	4.3	—	黑褐色	白色・黒色粒子・ 金銀母	良好	タテハケ	ヨコナデ		口縁部～ 35ビックP25- E3一筋	柄部		361
55	69	35号ビック ト	E-3区	平安	土師器	裏	(28.5)	7.3	—	赤褐色	白色・黒色粒子・ 金銀母	良好	ヨコハケ	タテハケ		口縁部～ 35ビックP15	柄部		362
55	70	35号ビック ト	E-3区	平安	土師器	裏	(29.6)	3.8	—	赤褐色	白色・黒色粒子・ 金銀母	良好	ヨコハケ	タテハケ		口縁部～ 35ビックP10	柄部		363
55	71	35号ビック ト	E-3区	平安	土師器	裏	(14.2)	6.4	—	褐色	白色・黒色粒子・ 金銀母	良好	ヨコハケ	タテハケ		口縁部～ 35ビックP16	柄部		364
55	72	35号ビック ト	E-3区	平安	土師器	裏	—	—	—	明褐色	白色・黒色粒子・ 金銀母	良好	ヨコハケ	タテハケ		口縁部～ 35ビックP9- 24	柄部破片		367
55	73	35号ビック ト	E-3区	平安	土師器	裏	—	—	—	赤褐色	白色・黒色粒子・ 金銀母	良好	ヨコハケ	タテハケ		口縁部破片	35ビックP7		368
55	74	35号ビック ト	E-3区	平安	土師器	巻きかま ど	—	2.0	—	赤褐色	白色粒子・金銀 母	良好				底部破片	3往一筋		365
55	75	50号ビック ト	E-3区	平安	土師器	外	(12.8)	1.8	—	明赤褐色	赤色粒子	良好				口縁部破 片	50ビックP3		368
55	76	50号ビック ト	E-3区	平安	土師器	裏	—	2.6 (8.2)	—	明赤褐色	白色・黒色粒子・ 金銀母	良好	ヨコハケ	タテハケ		底部破片	50ビックP1		369
55	77	50号ビック ト	E-3区	平安	土師器	羽釜	—	2.5	—	明赤褐色	白色・黒色粒子・ 金銀母	良好				柄部	50ビックP2		370
55	78	51号ビック ト	E-3区	平安	土師器	裏	(26.4)	3.9	—	馬褐色	白色・黒色粒子・ 金銀母	良好	ヨコハケ	タテハケ		口縁部破 片	51ビックP1		371
55	79	86号ビック ト	E-3区	平安	土師器	外	—	0.7	4.6	明褐色	白色粒子	良好				底部	86ビック一筋		373
56	80	造模外	E-3区	古墳時代	土師器	丸底小窓	(11.6)	6.1	2.6	明黄褐色	白色・赤色・黒 色粒子	良好				口縁部～ 底部	P42-P43		389
56	81	造模外	E-3区	古墳時代	土師器	裏	—	1.5	2.6	褐色	白色・黒色粒子	良好				底部	P41		390
56	82	造模外	E-3区	古墳時代	土師器	裏	—	2.8	(7.7)	明赤褐色	白色・白色粒子・ 金銀母・黒銀母	良好				柄部	P3		394
56	83	造模外	E-3区	4C後半	土師器	巻台	—	2.6	—	黄褐色	白色・赤色粒子	良好				接合部	P26		393
56	84	造模外	E-3区	古墳時代	土師器	裏	(17.2)	2.1	—	橙色	白色・黒粒子	良好				口縁部	P13		391
56	85	造模外	E-3区	9c末 10c	土師器	外	(11.6)	3.5	—	橙色	赤色粒子	良好				口縁部～ 底部	E3-一筋		399
56	86	造模外	E-3区	平安	土師器	外	(12.0)	3.5	—	橙色	白色・赤色粒子	良好				口縁部～ 体部	P27		396
56	87	造模外	E-3区	平安	土師器	外	(17.8)	4.5	—	黑褐色	白色粒子・雲母	良好				口縁部～ 体部	P19-P21		395
56	88	造模外	E-3区	平安	土師器	外	(16.0)	3.6	—	明赤褐色	赤色粒子	良好				口縁部～ 体部	P28		397
56	89	造模外	E-3区	平安	土師器	外	(16.0)	3.8	—	黄褐色	赤色粒子	良好				口縁部～ 体部	P23		398
56	90	造模外	E-3区	平安	土師器	外	—	2.3	5.5	褐色	白色・赤色粒子	良好				底部	P37		400
56	91	造模外	E-3区	平安	土師器	裏	(14.6)	3.4	—	明褐色	白色・黒色粒子	良好				口縁部～ 体部	P17		401
56	92	造模外	E-3区	平安	土師器	裏	—	1.95	(6.0)	にぶい赤	白色・黒色粒子・ 金銀母	良好				底部	P25		404
56	93	造模外	E-3区	平安	土師器	裏	—	3.2	(9.6)	明褐色	白色粒子	良好				底部	P3?		403
56	94	造模外	E-3区	平安	土師器	高台付环	—	2.6	(4.0)	明褐色	白色・黒色粒子	良好				底部	P20		392
56	95	造模外	E-3区	平安	土師器	外	—	1.7	(3.8)	明褐色	白色・黒色粒子	良好				底部	P39		405
56	96	造模外	E-3区	平安	須恵器	裏	—	1.9	—	灰色	白色粒子	良好				口縁部	E3-一筋		406
56	97	造模外	E-3区	平安	須恵器	裏	—	3.6	(7.2)	灰白色	白色・黒色粒子	良好				底部	P22		407
56	98	4号清	E-4区	平安	土師器	外	(12.8)	2.2	—	橙色	白色・赤色・黑 色粒子	良好				口縁部～ 体部	1清P3B		414
56	99	4号清	E-4区	平安	土師器	外	(12.4)	3.9	—	にぶい橙 色	白色・赤色・黑 色粒子	良好	タテハケ ナデ	ナデ		口縁部～ 体部	4清P3-4- P3B		413
56	100	4号清	E-4区	平安	土師器	外	—	0.8	(4.3)	にぶい黄 色	白色・赤色粒子・ 橙色	良好	タテハケ ナデ	ナデ		底部	4清PB		418
56	101	4号清	E-4区	平安	土師器	高台付环	—	1.8	(7.8)	明褐色	白色・赤色粒子	良好	020477A ナデ	ナデ		底部	4清P1		419
56	102	4号清	E-4区	平安	土師器	裏	(14.0)	1.2	—	褐色	赤色粒子	良好	タテハケ ナデ	ナデ		口縁部	4清P33		416

回収	番号	遺構	出土地点	時期	種別	器種	活量		色調	胎土	焼成	特徴			現存率	部位	注記	備考	実測番号
							口径	器高	底径				外側	内面	底部				
56	103	4号溝	E-4区	平安	土師器	糸	(12.4)	2.8	—	褐色	赤色粒子	良好	円柱形	素地	—	口縁部～ 全体	E4-P19		424
56	104	造溝外	E-4区	平安	土師器	糸	—	1.2	(5.6)	明赤褐色	白色・赤色粒子	良好	磨耗	素地	—	底部	E4-P13		425
56	105	造溝外	E-4区	平安	土師器	巻きかまど	—	4.4	—	にぶい褐色	白色・黒色粒子・ 食器母	良好	ヨコ穴・ス ス付着	妙跡	ナテ?	底部	E4-P15		430

第3表 遺物観察表(古墳時代・平安時代)

回収No.	採取番号	種類	石材	最大長(m)	最大幅(m)	最大厚(m)	重量(g)	備考
40	1	打製石斧	粘板岩	81	42	10	48	1配2層S-4
40	2	打製石斧	フォルン フェルス	98	44	12	70	4配2層S-7
40	3	打製石斧	フォルン フェルス	122	36	13	80	4配2層S-2
40	4	打製石斧	フォルン フェルス	106	36	10	54	S-5812集
40	5	打製石斧	フォルン フェルス	122	40	12	78	S-67
40	6	打製石斧	粘板岩	131	46	16	154	S-480
40	7	打製石斧	粘板岩	104	40	14	76	S-43
40	8	打製石斧	粘板岩	106	46	8	52	S-385
40	9	打製石斧	粘板岩	100	42	13	60	S-358
40	10	打製石斧	粘板岩	98	44	14	68	S-280
40	11	打製石斧	粘板岩	105	42	15	90	S-229
40	12	打製石斧	粘板岩	110	50	17	120	S-94
41	13	打製石斧	粘板岩	130	52	18	130	S-66
41	14	打製石斧	粘板岩	110	46	12	74	S-131
41	15	打製石斧	フォルン フェルス	100	49	12	80	S-33
41	16	打製石斧	粘板岩	85	32	12	28	S-126
41	17	打製石斧	粘板岩	108	36	11	58	S-258
41	18	打製石斧	砂岩	112	38	18	82	S-97
41	19	打製石斧	粘板岩	124	43	16	108	S-146
41	20	打製石斧	フォルン フェルス	110	43	19	118	S-209
41	21	打製石斧	フォルン フェルス	96	38	10	60	S-265
41	22	打製石斧	粘板岩	98	44	14	80	S-272
41	23	打製石斧	砂岩	108	44	12	88	S-426
42	24	打製石斧	砂岩	100	50	18	124	S-379
42	25	打製石斧	粘板岩	106	44	13	82	S-427
42	26	打製石斧	フォルン フェルス	108	48	14	78	S-011
42	27	打製石斧	砂岩	86	42	16	62	S-
42	28	打製石斧	粘板岩	108	40	14	82	S-398
42	29	打製石斧	フォルン フェルス	112	42	11	74	S-217
42	30	打製石斧	粘板岩	136	46	15	116	S-381
42	31	打製石斧	粘板岩	130	50	15	120	S-257
42	32	打製石斧	粘板岩	112	48	16	108	S-424
42	33	打製石斧	フォルン フェルス	90	41	13	58	S-279
42	34	打製石斧	砂岩	85	49	19	72	S-022
43	35	打製石斧	フォルン フェルス	108	56	17	148	1厘周辺一括
43	36	打製石斧	粘板岩	100	50	8	104	S-355
43	37	打製石斧	粘板岩	89	50	7	80	S-141
43	38	打製石斧	砂岩	65	48	22	62	S-109
43	39	打製石斧	粘板岩	80	54	12	64	S-475
43	40	打製石斧	フォルン フェルス	92	50	14	90	S-021
43	41	打製石斧	フォルン フェルス	62	48	15	78	S-423
43	42	打製石斧	粘板岩	125	46	14	90	S-044
43	43	打製石斧	粘板岩	113	60	16	166	S-210
43	44	打製石斧	フォルン フェルス	82	45	20	76	S-261
43	45	打製石斧	粘板岩	104	50	15	104	S-348
44	46	打製石斧	フォルン フェルス	85	44	15	68	S-038
44	47	打製石斧	粘板岩	84	50	11	62	S-188
44	48	打製石斧	フォルン フェルス	110	54	20	138	S-304
44	49	打製石斧	フォルン フェルス	88	52	19	108	S-216
44	50	打製石斧	頁岩	90	56	14	68	1配東一括
44	51	磨製石斧	砂岩	108	55	38	380	S-244
44	52	磨製石斧	砂岩	136	42	39	336	S-256
44	53	磨製石斧	砂岩	64	40	11	46	S-032
44	54	すり石	花崗岩	73	75	32	260	1厘S-3
44	55	磨石+凹石	花崗岩	82	58	43	294	2厘S-3
45	56	磨石	花崗岩	146	52	55	764	3厘一括
45	57	磨石	花崗岩	97	79	30	342	4配S-26
45	58	磨石	花崗岩	61	74	62	338	4配S-17
45	59	磨石	花崗岩	85	80	48	372	S-575 2集
45	60	磨石	花崗岩	104	76	53	530	S-581 2集
45	61	磨石	花崗岩	116	102	58	1008	3集一括
45	62	磨石	花崗岩	100	66	38	464	3集S-4
45	63	磨石	砂岩	81	44	46	63	6ビット一括
45	64	磨石	花崗岩	73	34	27	100	東配一括
46	65	磨石	花崗岩	78	98	75	994	3配S-1
46	66	磨石+凹石	花崗岩	56	72	17	138	4配S-18
46	67	磨石+凹石	花崗岩	124	50	50	384	5配S-9

回収No.	採取番号	種類	石材	最大長(m)	最大幅(m)	最大厚(m)	重量(g)	備考
46	68	磨石+凹石	花崗岩	106	90	56	652	5配S-9
46	69	磨石+凹石	花崗岩	82	76	42	384	S-677 6配
46	70	磨石	花崗岩	89	72	46	368	2集一括
46	71	磨石	花崗岩	122	75	53	706	S-567 2集
46	72	磨石	花崗岩	62	68	57	396	S-667 2集
47	73	磨石	花崗岩	128	98	58	1132	4ビットS-2
47	74	磨石+凹石	花崗岩	50	40	27	66	10ビット一括
47	75	凹石	花崗岩	90	80	30	256	S-547
47	76	凹石	砂岩	98	87	40	332	S-193
47	77	擦器	砂岩	34	60	11	18	4ビット一括
47	78	擦器	頁岩	68	62	28	182	1厘周辺一括
47	79	擦器	花崗岩	98	70	61	674	S-666 6配
47	80	石錐	黑耀石	25	18	6	1.5	S-112
47	81	石錐	黑耀石	24	18	3	0.7	S-617
47	82	石錐	黑耀石	22	18	2.5	0.7	S-615
48	83	石錐	チャート	20	13	3.6	0.7	S-237
48	84	石錐	黑耀石	20	14	6	1.3	S-138
48	85	石錐	黑耀石	15	16	3	0.3	S-235
48	86	石錐	黑耀石	23	11	0.35	0.7	S-140
48	87	石錐	チャート	23	13	0.4	0.6	S-028
48	88	石錐	黑耀石	11	9	0.2	0.2	S-433
48	89	石錐	黑耀石	13	9	0.2	0.2	S-362
48	90	石錐	黑耀石	14	12	0.2	0.2	S-594
48	91	石錐	水晶	16	12	0.4	0.5	S-649
48	92	石錐	チャート	12	11	0.3	0.4	S-070
48	93	石錐	チャート	20	14	0.4	0.7	S-106
48	94	石錐	水晶	17	13	0.3	0.6	S-028
48	95	石錐	黑耀石	20	11	0.4	0.5	S-359
48	96	石錐	黑耀石	16	14	0.2	0.3	S-139
48	97	石錐	黑耀石	15	13	0.3	0.5	S-034
48	98	石錐	黑耀石	19	17	0.3	0.6	S-509
48	99	石錐	黑耀石	23	15	0.3	0.7	S-298
48	100	石錐	黑耀石	16	13	0.2	0.2	S-494
48	101	石錐	黑耀石	14	12	0.2	0.3	S-254
48	102	石錐	黑耀石	26	21	0.4	1.3	S-190
48	103	石錐	黑耀石	17	12	0.3	0.3	S-478
48	104	石錐	黑耀石	23	14	0.3	0.5	S-058
48	105	石錐	黑耀石	17	11	0.3	0.4	S-482
48	106	石錐	黑耀石	22	14	0.3	0.5	S-334
48	107	石錐	黑耀石	21	15	0.4	0.7	S-439
48	108	石錐	黑耀石	12	11	0.2	0.2	S-306
48	109	石錐	黑耀石	17	11	0.3	0.3	S-214
48	110	石錐	黑耀石	14	11	0.3	0.3	S-056
48	111	石錐	黑耀石	24	12	0.2	0.6	S-016